

俳句雑誌

令和八年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九卷第八号

水 明

2026 8月号



《今月のかな女》

母に吊る盆燈籠を消さじとぞ

『龍膽』『雨月』所収 昭和二年

長谷川かな女

この句が詠まれた昭和二年一月に敬愛した母が亡くなり、八月に新盆を迎えた。亡母のために新しい盆燈籠を用意し、椽側の軒に吊るした。現代のような電球を灯すものではなく、蠟燭を使うものであったから、風の具合で消え易い。母の燈籠の灯を消してはならぬと懸命に守っているかな女の姿が見えてくる。かな女の母は、何かにつけて細かく気が行き届き、夫の零余子は無論のこと、母を知る多くの人からも同じように思われていたようだ。であるから、かな女は母の気配りに応えるべく頑張ったのだと思う。揺れる盆燈籠を見上げながら母を偲ぶかな女であった。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

花桐の雨むらさきの静寂かな

梅澤佐江

季音月

おひらきは小学校歌皐月晴

大塚茂子

季音花

山若葉ニンフが誘ふ森のカフェ

染谷風子

水明集

佇めば思ひ出めぐる夏の庭

丸屋詠子

鼓笛集

卯波立つ五浦六角堂の黙

石井直子

山紫集

麦秋やヘリコプターのよく飛ぶ日

石田慶子

水 明

令和 8 年
8 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

勇 雲 (作品)

虹とこしへに (近詠)

追慕の母 (近詠)

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

ゆずり 葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

全国大会の記

全国大会入選句

山本鬼之介

梅澤佐江

近藤徹平

染谷風子

檜鼻ことは

梅澤佐江
大橋 廸代
ほか

大塚茂子
松宮保人
正木 萬蝶
ほか

染谷風子
梅澤輝翠
渋谷きいち
ほか

内野義悠

網野月を

青木鶴城



句集喝采
俳誌望見

菅原卓郎
梅澤輝翠

水明集

丸屋詠子
阿部幸代

綿引まりこ
ほか

りんどう忌のご案内

62

作品鑑賞

山本鬼之介

63

水琴窟（六月号鑑賞）

池田雅夫

67

水明発展基金御礼

69

山紫集

70

山紫集作品評

網野月を

74

鼓笛集・作品評

日高道を

76

例会報・各地句会報

80・83

水明競詠のお知らせ

88

水明塾のお誘い・風声

89

後記

題字・・長谷川かな女 表紙・・内田恵子 カット・・福田千春

勇 雲

山本鬼之介

鈴 蘭 を 咲 か せ 洋 館 静 も り ぬ

若 竹 そ よ ぐ 神 前 婚 の 控 室

朝 風 に 苛 立 つ 女 と ば つ ち り

理 科 室 に 滾 る フ ラ ス コ 大 西 日	向 日 葵 に 迎 へ ら れ た る 字 の 道	残 さ れ し 紫 蘇 の 孤 独 よ 刺 身 皿	夕 風 の 椽 ふ つ ふ つ と 小 津 映 画	人 生 は 予 習 復 習 雲 の 峰
---	---	---	---	--

虹とこしへに

梅澤佐江

参道に沢の水音苔の花
万緑へ老鶯の声澄み渡る
薫風や虚子の矢倉は数歩先
朱夏の墓師に目見えむと斜め建て
小さき墓へ心尽しの額の花
夏めく墓碑に朱の文字幽か「伊藤柏翠」と
朱文字に秘むる至上の愛や不如帰

過日の若松例会の兼題「虹」より
高浜虚子の自伝小説『虹』を知り、
四部作迄読み進めると、肺結核により
二九歳で夭折した孫弟子・森田愛
子と、同じく療養中の弟子で画家・
伊藤柏翠が愛子と出会い、俳句を通
じて愛子を介護する母と三人で生活
を共にする様子が描かれていて、二
人を指導する虚子との深い師弟愛、
切なくも純粹な交わりが綴られてい
る。虚子が見舞いに訪れた折、虹が
かかった瞬間に愛子が「あの虹の端
を渡って鎌倉へ行く事にしましょう。
今度虹が立った時……」と独り言の
様に言った。この出来事から『虹』
の物語は始まったのである。

虹の上には小諸も鎌倉も

愛子の絶句

今日、鎌倉にも分骨されている愛
子の墓に時空を越えて訪れている。

追憶の母

近藤徹平

敵 潜 に 怯 え し 母 子 冬 の 海
喘 ぐ 子 に 我 が 命 を と 母 寒 夜
苛 め 児 に せ め て 嘔 み つ け 母 四 月
敗 戦 忌 「 ギ ブ ミ ー チ ョ コ 」 を 叱 り し 妣
終 戦 日 考 の 帰 国 を 待 ち 星 に
孟 蘭 盆 会 慈 愛 菩 薩 の 笑 む 写 真
カ ー ネ ー シ ョ ン 妣 の 二 倍 半 生 か さ れ て

私が七歳の昭和18年母と弟妹の四人で満州から内地へ引揚げた。極寒が原因で母が発病したので治療は内地の病院でと父が下した決断に母は従った。直ちに大学病院を受診したが帰途三四郎池を放心したように見つめていた。その後は全く上京しなかった。終戦直前ソ連軍の満州侵攻で父の音信は途絶えた。母は病身で幼子三人を抱え悩みは尽きなかったと思う。やがて休日私が炊事洗濯をする日もあった。父が帰還して間もない昭和22年母は背負い続けた重荷を父に引継いで天国へ旅立った。

雪 嶺

● 季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇冬季五輪（五月号）

石 井 喜 恵

◇青山河（五月号）

五 明 昇

未完成でふ完成氷面の舞ひ
髪解く少女の笑顔雪燦と
黒雲や競技中断雪霏霏と
カーリング胸にずしりと石冴ゆる
祝勝のグラスにことり氷溶け
ファイナル綺麗羅と待春のベローナ
己が身の軸正中に春に佇つ

ミラノ・コルティナ冬季五輪を詠む七句。日本とイタリアの時差は九時間。テレビ中継の多くは深夜から早朝にかけてであるが、日本中を興奮させた十七日間であった。一句目、三浦璃来・木原龍一のリクリュウコンビが大逆転の末、日本初のフィギュアペア金メダル、日本中が興奮の坩堝と化した季語「氷面」が美しい。二句目、スノボ日本女子初の金メダリスト村瀬選手の点描か。三句目、ジャンプ男子スパー団体は悪天候により二回目までで打ち切り、結果は六位で終わった。多くの日本人がこの猛吹雪を恨んだ。四句目、作者の応援するカーリングは一次リーグで敗退。「胸にずしり」は作者の胸中。五句目、冬季五輪過去最多の二十四個のメダル獲得を祝す作者の夜明けの乾杯。六句目、ローマ神話に材を取る。ベローナは戦いの女神で軍神マルスの妻。三月はマルスの月である。作者は今年かな女賞を受賞。祝意を表したい。

青嵐血潮滾らす木曾の駒
足湯して遠郭公の奥信濃
翡翠の瑠璃が引き裂く天竜峡
夏薊鬼女伝説の遺る郷
五千尺神居の里の夏館
縞枯れてゐて万緑の八ヶ岳
星降りて六根浄き夏の山

作者の母郷信州の名勝・伝説を詠む七句。一句目、木曾駒は在来種で小型だが足腰が強く山岳戦に強い馬として木曾義仲の軍馬に使われた。中七の措辞が木曾駒の本性をよく表し、季語「青嵐」の幹旋が秀逸だ。二句目、足湯で知られた奥信濃の湯田中温泉か。同温泉は長野電鉄駅に近く、筆者も二十年前に家族旅行をした記憶がある。四句目、北信濃の戸隠や鬼無里に伝わる「鬼女紅葉伝説」を詠む。美しく聡明でありながらも最後は鬼として討伐された女性の悲しい話だ。夏薊との取合せが動かない。五句目、海拔五千尺の上高地を詠む。同地は古来より神の降り立つ地（神降地）と称され、梓川の清流と山々が織りなす神秘の姿は荘厳であり、今や日本屈指の本格山岳リゾートである。六句目、北八ヶ岳の縞枯山を詠む。縞枯れとは、針葉樹林が等高線に沿って帯状に立ち枯れる現象である。信州の自然と歴史を堪能させる珠玉の七句だ。

◇白頭の川鵜（六月号）

町野広子

名作は未完に終る冬夕焼
等間隔に二月の空を過ぐ七機
齒科眼科内科整形二月尽
白頭の川鵜と出会ふ春の川
繕ひし羽根より零る春の水
コンマスの一音に和す春の宵
重ね置くブリキのバケツ万愚節

作者の日常詠七句。添付のエッセーを参考に鑑賞を進めた。一句目、未完の名作として宮沢賢治『銀河鉄道の夜』や夏目漱石『明暗』が知られている。しかし、季語「冬夕焼」から推測すると、名作はご自身の悔い無き半生であり、未完は俳句の道か。作者の心境を照らす「冬夕焼」が美しい。二句目、キャンプ座間のヘリコプター訓練を詠む。キャンプ座間は旧陸軍士官学校の跡地だ。昭和十二年市ヶ谷から移転した際昭和天皇より「相武台」と命名された。今は在日米陸軍司令部等が置かれ軍都の面影は変わらな。三句目、全文漢字の句。季語「二月尽」から解釈すると散歩を兼ねた通院か。明日から春本番の三月だ。自然と足も心も軽くなる。四句目、川鵜は全身が黒いと言う印象が強い。頭が白いのは冬から春にかけての繁殖期の婚姻色である。川縁の散歩に「白頭の川鵜」の発見はさすが熟練の俳人の眼である。五句目、前句と同景を詠む。鵜類の翼は油分が少ないため泳いだ後必ず広げて乾かすという鑑にある。観察眼の効いた句だ。七句目、「ブリキのバケツ」は何の象徴か。季語「万愚節」が効いている。

◇春尽く（六月号）

松井由紀子

ものの芽の折りのかたちよりひらく
初花や幸せさうな散歩道
春コート銀座のひとになりに行く
うろ覚えの唄はララーラ春麗
春の雨あかるき昼を降り止まず
春尽きて家居に馴染むくらしかな
ポラリスに会はむと北の窓開く

作者は今年二月句集『葛の花』を上梓。この稿を起こすに際し再読した。収録の三一七句の印象は、第一にリズム感のよさ、第二に語彙の豊かさ、と季語に対する造詣の深さ、第三に日常の素直な描写と的確な季語との取合せだ。両者は互に響き合い、心地よい詩情を醸し出している。画家としての眼が個性ある俳句に仕上げている。一句目、「祈りのかたち」はキリスト信者が胸の前で両手の指を組み目を閉じて頭を垂れる所作か。生命の尊厳に想いが至る句だ。三句目、中七下五のフレーズが諧謔。昭和初期のエノケンの歌「洒落男」を彷彿させる俳味溢れる句だ。四句目、「ララーラ」の意外性が良い。「ハミング」では平凡で俳句にならない。又下五の季語「春麗」のラ音とのルフランが秀逸だ。五句目、「春の雨」のしとしと感の中に春の明るさと喜びの発見。六句目、外出より家居に慣れた生活を「行く春」の傍題「春尽く」に託し、老境を控え目に表現。七句目、北極星をポラリスと表現する意外性。読者に韓流ドラマ「冬のソナタ」や米国海軍のSLBMまで連想させる。俳味と詩情の滾る七句である。

ゆずり葉

◆季音六月

檜 鼻 ことは

酒を愛し旅を愛して花に逝く

鈴木康世

句は、「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」と詠んだ西行法師、あるいは酒と旅を愛した若山牧水、種田山頭火といった漂泊の表現者たちを彷彿とさせます。

束縛を嫌い、酒と旅を友として、最後は美しい花の季節に、まるで自然に還るように静かに世を去る。実際にはなかなか出来ないが故に、慌ただしい現代を生きる者にとって、このように生を愛し、美に殉じるような生き様は、どこか羨ましく、そして憧れるものがあります。

読後、一陣の風のような爽やかさを感じた一句です。

草に寝て初蝶空へ消えゆけり

永野史代

春の陽だまりのなか、大地に体を預けながら、吸い込まれそうなほど高い春の空を見上げていると、どこからともなく作者の視界に初蝶があらわれます。初蝶は、待ちわびた春の

訪れを告げる喜びの象徴のようでもあります。その蝶は留まることを知らず、青空の中へと消え去って行きます。

春が来た喜びと形のないものへの儚さが美しく詠まれた一句。深い余韻が静かに残ります。春の心地よい温かさ、どこか切ない静寂が目の前に広がる景色の中に身を置くことができました。

さまざまな花を揃へて利休の忌

日高道を

寺之内通りより上御霊前通りへ続く小川通りの辺りは閑静な佇まい。足を進めると、ほどなく、表千家不審菴、裏千家今日庵の門前に至ります。

さて、千利休にまつわるエピソードの一つに、「ある日、豊臣秀吉が、利休の庭に朝顔が見事に咲いているとのことで出かけたところ、庭には朝顔がまったく見当たりません。興ざめな思いで茶室に入ったところ、色も鮮やかな朝顔の花一輪だけが床の間に飾ってあった」という逸話があります。

利休の命日は旧暦二月二十八日。利休ゆかりの人たち、茶道を親しむ人たちの此処彼処で利休を偲び、静謐な庭を眺め、侘び寂びの趣ある茶室にて、美しい懷石料理を味わい、酒を嗜み、季節の和菓子と濃茶、薄茶で過ごすという茶事が催されたことでありましょう。

それぞれの茶室にはどのような茶花が生けられていたのでしょうか。句の持つ、端正で心落ち着く世界を楽しませていただきました。

創造の神に脱帽 蝌蚪の紐

原田 秀子

子どものころ、水田に産み落とされた蛙の卵を見つけては面白がっていたことを思い出します。

ゼリー状の長い紐の中に、黒く小さな卵が規則正しく、あるいは混沌と並んでいる蛙の卵。句からは、作者の生命の神秘に対する驚きと、敬意がユーモラスに伝わってきます。

幾何学的で不思議な形をした蝌蚪の紐から、時が来れば一斉に命が跳ね出すという自然界、創造の神の圧倒的なエネルギーを前にして、作者は、自然への畏怖を脱帽と言う言葉で、表現しています。「神の仕業だ」と直感したビュアな作者の感動が瑞々しい一句です。

万愚節見たか空飛ぶ馬二頭

内田 恵子

万愚節の嘘といえ、クスッと笑えるような冗談やちよつとした悪戯が定番でありましょうが、作者が仕掛けたのは「空飛ぶ馬」という、壮大で美しい言葉の遊びです。

「どうせ嘘なら、世界をこれくらいロマンチックに騙してみせよう」という、表現者としての粋な心持ちと、少年のような無邪気さが何とも素敵でなりません。

もし、作者の隣に居たら、「まさか」と笑いながらも、きつと一瞬だけ空を見上げてしまったことでしょう。

「言葉ひとつで現実の景色をファンタジーに変えてしまう」という、言葉が持つ魔法のような力を發揮した、非常にポップで、かつ洗練された一句。理屈抜きに大好きな一句です。

振り向きて母を目で追ふ入学児

新 暦文

入学の日の子どもの心情を、素直に捉えて詠まれた一句です。

句では、「振り向きて」の動作に続き、「母を目で追ふ」と視線だけがいつまでも母を離さない様子が描かれています。

入学児は期待に胸を膨らませる一方で、不安も抱えています。その揺れる気持ち、子どものふとした仕草だけで表現しているところがこの句の白眉です。

母と子の姿が微笑ましく、少し切なく、読まれた人の共感を誘う佳句だと思います。

季音雪

むらさきの静寂

梅澤佐江

花桐の雨むらさきの静寂かな
幽玄や仕手の摺足薪能
清流を旅の枕に明易し
短夜のカーテンコールとめどなし
丹の橋を渡る白無垢風薫る

遠花火 大橋廸代

この道で出会ひ訣れし夏木立
仏弟子になりたき蟻が末席に
友はいま黄泉平坂遠花火
生身供昇く黄の僧衣夏木立
横風にたぢろぐ空師夏木立

短夜 大場順子

宿坊の飯炊ける音明易し
薫き込めし香の残り香明易し
産声を待つ短夜の長さかな
夏草に胸まで溺れ磨崖仏
五十鈴川の水もて手水青葉風

夏 霞 大村節代

中 夏 五明 昇

夏霞静かに暮るる山上湖
郭公鳴く腰掛石のありがたや
窯出しの素焼きの器郭公鳴く
夏木立昔こころで大軍おほいくさ
夏霞コンテナ船の攫はるる

旅情またきりと旨き洗鯉
落人の伝へを今に桐の花
父の顔して父の日を遣り過ぐす
夏至の海入り日を塗す真帆片帆
白南風にどんと胸貸す横綱碑

葉 桜 菊池ひろこ

モンロー 近藤徹平

グループで来る葉桜の水飲み場
葉桜の風の重さのゴルフ場
晩春や夜間飛行の灯のねむし
菖蒲湯の湯気満つ座敷母の里
すぐ梶棒あがる若葉の人力車

モンローの足形に触れ羅府の初夏
天守閣の映ゆる水面やあめんぼう
桐の花幟はためく関ヶ原
銭湯の屋根越しはるか五月富士
終点のバスの網棚カーネーション

婿を取る 境 延 昭

婿を取る総領むすめ桐の花
襟足を見せて年増の藍浴衣
夏至よんべ夫の帰宅の午前さま
父の日や父は元気で留守が好し
赤富士を崇めて浅間一の宮

夏はじめ 島 津 初 花

六月の風に乗り来る駅ピアノ
手と足のバラバラ体操夏はじめ
応募に夢膨らます桜桃
さくらんぼ掌に受け若返る
花のごと盛られし夕餉やや薄暑

夏 草 鈴 木 康 世

優游の鰭長鯉や皇居夏
夏草や乗り損ねたる熱気球
首塚に伸び放題の夏の草
夏草や配流の里の館跡
夕焼や中也の詩を口遊む

夏 木 立 十 倉 和 子

一筋の道しろじろと夏木立
神輿昇く顔ぶれ揃ふ夏木立
若宮の朱塗りあざやか夏木立
神木と知らず吹かるる蛇の衣
藩侯の騎馬像駆くる夏木立

ホップステップ

鳥羽和風

ホワイトリカー

町野広子

柏餅食ぶる胃袋別にあり
命日に妻かも知れず初蛭
柳刃もきらりと光り背越鮎
切幣が細波に浮く海開き
助走からホップステップ梅雨あがる

蛇住むといふ古民家の高天井
石垣に添うてゆるりと動く蛇
子の知らぬ母の友達桐の花
異国語の飛び交ふ町や桐の花
ホワイトリカーに浸る青梅の酔ひ心地

貴公子 永野史代

初夏に 松井由紀子

いさぎよく落ちて青梅悔のなし
粒よりの青梅は若き貴公子
あの子が欲しいあの子じゃ分らん春の暮
昭和の日ハーレーダビットソン走る
菓子匠の指しなやかに春の昼

木洩れ陽や蟻ちりちりとさりさと
緑陰へ吹くオカリナのC長音
あどけなや厨で生れし葱坊主
ゆつくりと星踰るる夏至の宵
渦巻くは志功の雲ぞ五月富士

隅の席 丸山 マスミ

一筋の光となりて蛇泳ぐ
斥候か右往左往の蟻一つ
夏至来る進み癖ある腕時計
網繕ふ無口の漁師雪の峰
夏暖簾くぐり馴染の隅の席

ささくれる 茂木 和子

風格は家の主たる青大将
蛇泳ぐ川の後先ささくれる
振り向けば桐の花咲く通過駅
錯覚は夢を紡ぎぬ桐の花
棚引くは雲か霞か桐の花

旅の宿 森川 義子

愛鳥週間目覚め清しき旅の宿
愛鳥週間見知らぬ同士笑み交はし
愛鳥週間ふつとほぐれしわだかまり
気の通ふ友居る幸やさくらんぼ
持て成しの筍飯や山の宿

青梅雨 森本 早苗

ゴンドラの駅舎を包む青き鳶
日雷高室院の句座止まる
青梅雨やフラダンサーの踊り抜く
圧巻のアナベルの丘揚羽蝶
ポニーテールの誰か待つ夏木立

梔子の闇 山中 みどり

下町の路地毎競ふ四葩かな
大輪の紫陽花遺影の眼が笑ふ
白紫陽花残されし者の悔いの色
手を合はす曾孫にお下りのさくらんぼ
降り止んで梔子香る闇となり

多摩中央公園界限 網野 月を

梅雨空や雲の流れを見つめてゐ
海芋かな造成池といふことも
水無月や坂は上りであることも
寄植ゑのけやきの梢若葉騒
梅雨空や入り俟つ人のこころかな

山路 石井喜恵

先頭を信じ切つたる蟻の列
山路行く百の燭あり花茨
桐の花梢に懸かる昼の月
藍深む暮色に揺るる桐の花
何事も成り行きまかせ蛇跨ぐ

桐の花 石山 かつ子

この家にいとさん二人桐の花
露に降る雨足つよく夫の病む
条幅の墨跡太し梅雨晴間
携帯ラジオ軒に吊るして茄子選果
友悼み来し足もとに桐の花

羽 搏 く 内 田 恵 子

点 描 で 描 く 自 画 像 麦 嵐
羽 搏 く や 両 手 広 ぐる 麦 の 秋
恐 竜 の 卵 の 化 石 ほ と ぎ す
透 け 透 け き ら ら ひ ら ひ ら 少 女 ゆ く 夏 野
父 の 日 や 百 科 辞 典 を 枕 に す

☆

☆

特集

「好き」を俳句に

趣味と俳句

浅川芳直／折勝家鴨
加藤右馬／岸田祐子
小林貴子／近 恵
阪西敦子／佐藤文香
仙田洋子／辻村麻乃
成田一子

■ 今月の華

楠本奇蹄／吉原文音

■ 巻頭三句

久保純夫／藺草慶子
岩田由美／井越芳子
中川雅雪／河原地英武

■ 俳句と短歌の10作競演

鈴木牛後＋川本千栄

■ 麒麟 吟行記

……遠藤史都

■ 今月のハイライト

「耕」「対岸」「青嶺」
「杏長崎」「風のサロン」

■ 好評連載

伊野孝行
人はなぜ風景を
描くのか

吉川千早
俳壇ランドスケープ

青木亮人
句の手触り、俳人の響き

大西朋
俳句へのまなざし

橋本喜夫
俳句のレトリック

藤村公洋
俳句のつまみ

神作研一
てのひらの江戸

——古典籍を旅する

毬矢まりえ
諸家書架

石井隆司
たもとほる

山本潔
俳句よもやま話

一望百里

俳句四季
Haiku Shiki

2026年8月号

7月17日発売
定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

初夏の風 大塚茂子

燕の子秩父霊場深庇
 ひるがへり蔵町あそぶ燕の子
 陶狸並ぶ茂林寺夏木立
 眉目美しき土偶の纏ふ初夏の風
 おひらきは小学校歌皐月晴

噴水の形 正木萬蝶

噴水の女形の形に崩れけり
 パドックの牝馬の氣負ひ青嵐
 夏草や津津浦浦に一の宮
 対岸は釜山対馬の風青し
 薔薇真紅少女あざとく首傾ぐ

河鹿 松宮保人

散り際の刹那惜しまぬ大牡丹
 リハーサル皆真面目なり夏浅し
 潮騒を掻き消してをり雨蛙
 溪流に河鹿鳴きをりかずら橋
 老杉の守護の茂りや須波阿須疑

断捨離 青木鶴城

独逸語も英語も駄目で時鳥
 少年の大志と夢や茄子の花
 矜持もて生きよと母の粽かな
 亀鳴くや導師の喝に見えし魂
 朴若葉断捨離てふ名の未練かな

黙黙と 日高道を

若葉風森の奥より生まれけり
 葉桜や一人は池の端を行く
 花は葉に恋の行方も知らぬまま
 薫風や黙黙と行く少年兵
 雲の峰崩れて終はるスクワット

新茶 檜鼻ことは

一輪を差して新茶の一滴
ボヘミアングラスの花瓶夏に入る
自転車の並ぶ路地裏夕薄暑
ひとりと言ふ静かな時間明易し
木木香る青葉の里の能面師

四方山話 曲淵徹雄

郭公やクルスの墓の混ざる苑
斎王代の笑まひふくやか懸葵
若葉風詩人の魂の宿る家
薔薇の門婆の陣どる立ち話
田植機の独り舞台を射す入日

盛夏 池田雅夫

甚平の威を借る狸おやぢかな
話半分逃したる大岩魚
夜濯や一枚きりの着た切り雀
日盛や牛の背中の真つ黒け
子守唄蟬もやうやく寝静まり

いよよ夏 河野はるみ

人形を操る所作や風薫る
陽が月を置き去りにして夏きざす
板の間をぺたぺた歩き夏きざす
片蔭を無音で過る蟹歩き
おとなひも無く無病息災遠花火

心太 原田秀子

ところ天黒蜜かけてああ天与
磯の香を灰とのこしてところ天
寄席跳ねてあとは「みはし」のところ天
色褪せし母のパラソル手放せず
土手をゆく白きパラソル見え隠れ

屋敷林 荒井俱子

老鶯の声すきとほる屋敷林
老鶯や屋敷祠のある旧家
青嵐ファイトファイトと部活の子
ふる里の駅に潮の香青嵐
新宿は眠らぬ街や火取虫

薪能 原田自然

清流にかじか澄む声能の郷
境内に鼓強弱能舞台
能面の百相並び青嵐
苔の花まとひて廻る水車小屋
能面師多くは語らず河鹿鳴く

ベール屋 野口和子

梅雨晴れ間庭師の鉢響きけり
父の日や禁酒禁煙慣れしころ
新しき白靴に慣れ街歩き
吾子のごと育てしものや夏野菜
新緑や山家に開くベール屋

青の季節 福田千春

青嵐墓に供ふるリポピタン
青嵐とり残されし三輪車
川からの風に潮の香遠花火
青梅雨や子は退屈を八つ当り
顚顚の疼く目覚めや迎へ梅雨

薔薇園 石川理恵

明易の厨に誰の水の音
巢の中の子燕見たし背伸びせり
薔薇園に集ひ女子会日和なり
薔薇活けてだんだん眠くなりにつけり
青梅や疵あるものをいとほしみ

縄文 松島寛久

行脚果て八百姫たたずむ春の浜
幽玄の緑夜へ鼓「車僧」
ペアルック銀座の柳恋に揺れ
惜春や縄文の里に丸木船
正座して敬佛と墨し春の行く

夏料理 飛永鼓

おいでやすゆつくりしやす夏料理
せせらぎの音も食する夏料理
取れ立ての野菜並ぶや夏料理
ゆつくりと移動する雲風薫る
御洒落して会ひたき人や風薫る

未央柳 松山清子

未央柳揺れ遠ざかる三輪車
五月雨や屋上庭園ひつそりと
姉逝きて五月の雲の遥かなり
夏柳川辺に酒蔵立ち並ぶ
神の滝近付きすぎてず濡れに

太陽の子 田中章嘉

暑さにも太陽の子の逞しさ
少年に広場が欲しい野球かな
砂埃サッカー遊び声が飛び
沼の縁小魚取りも危な気に
春過ぎて蜥蜴顔出す朝の庭

夏木立 西浦千枝子

夏木立奥へ奥へと空なくす
夏鶯の長く鳴くのはラブコール
喪の家とは思へぬ賑はひ螢飛ぶ
青葉風開け放たれし子の新居
シャンパンの泡を楽しみ星涼し

飛鳥山 保坂翔太

黙の森から山霊のこゑ朧の夜
大仏が上目遣ひや暑き春
春風がみちびく都電飛鳥山
螢火と見紛ふ明かり夕霞
西瓜蒔く頭上過ぎゆく軍用機

少年期 横山君夫

庭先に木の椅子二つ夕薄暑
野苺の雨をはじきて光りけり
牧閉ぢて牛無き月日遠郭公
どの田にも絶えざる水輪あめんぼう
心太突いて飛び出す少年期

五月富士 笹本啓子

草笛を吹きて青春呼びもどす
鶯数羽遊ばせ代田輝けり
郭公の声後先に札所道
退院の決まりし朝の五月富士
東上の車窓にせまる五月富士

母思ふ 石田慶子

夏きざす隣家の灯下まだつかぬ
友の文ポストにことり風薫る
柏餅経木に包む母の里
粽解く母の手元を三兄弟
トラツクに丸太ぎつしり若葉風

夏至の海 下川光子

海峡のタンカー幾つ夏至の海
夏至ゆふべアフリカ小さき世界地図
夏至の昼テニスコート足眩し
琴の音に歩調を合す菖蒲園
早苗田へ水の匂ひの雲走る

夏木立 葛城千世子

車窓より白波岩と夏木立
減速し亀産卵の南風の浜
出迎への友若々し聖五月
花展台の花粉掃ふや夏帽子
小満や撒花すばやく終列車

俳句

8月号
予告

7月24日発売

巻頭作品50句 一 大木あまり
作品21句 一 松尾隆信・津川絵理子

秀句への荒療治!?

禁じ手の使いどころ

- 総論 「禁じ手」の効果と注意点
- 各論 季重なり／切字の多用／句またがり／字余り・字足らず／直喩／濁音の助詞／観念句・抽象句／略語・造語・新季語
- コラム 類句と本歌取り／孫俳句と吾子俳句／犬俳句と猫俳句

採録
特別講座

宇多喜代子を語る
宇多喜代子×西村和子×
小澤實×神野紗希

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖 秋

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

夏芝居

染谷風子

若葉風開山堂の絵馬揺らす
嘗ても今も所争ひ賀茂祭
花街を帰る芸者を夏の月
山若葉ニンフが誘ふ森のカフェ
着流しの殺陣師が仕切る夏芝居

簾椅子

渋谷きいち

簾椅子の父に呼ばれて正座かな
それぞれの夢親子二代の簾寝椅子
昨夜より木の葉に重き青葉雨
廃校の庭に君待つ濃紫陽花
街角に人恋ふる歌巴里祭

洗ひ髪 梅澤輝翠

半夏生十八歳の左袂
ゆつたりと夜風にゆだね洗ひ髪
丸盆に川のごとくに冷さうめん
薫風や越後路ゆるく一両車
銀輪にセーラーカラー初夏の朝

初夏 越田栄子

子燕や里の暮らしの活気づく
初めての利根川を知る燕の子
水すまし跳ねて水輪にあるリズム
超小型ドロインのごとあめんぼう
ペアカップやさしく洗ふ緑夜かな

夏のペース 菅原卓郎

女工越えし峠に謂れ桐の花
トルソーの胸に鱗入る薄暑かな
御仏の天の網引く梅雨の雷
十代の恋に徒なし茄子の花
こもり沼の翳に孤高の水澄し

昭和は遠く

新

曆文

簾椅子の軋みに昭和遠くなり
青葉風古刹の瓦濡れてをり
青葉闇水音だけの峡となり
諸国の風集まりぬ夏暖簾
紫陽花の駅舎を纏ふ無人駅

晩春

池田桂子

百花咲く安房の岬の花吹雪
小半の酒入る徳利春の宵
浅酌の肴に少し若布和
春眠の夢の幼き頃の家
正客の翁の結城の花衣

初がつを

清水桂子

真青なる空へ真白き卯波立つ
琴の音の聞こゆる門辺桐の花
陽光に煌めく水面代田かな
初かつを器用にさばく左利き
つくづくと蟻のくびれの羨まし

麦秋

山戸美子

瀬戸内を臨む畑や麦の秋
空撮の波は金色麦の秋
麦秋や麦は嫌ひと幼き日
炎帝や発条職人の鋭き眼
発音を駄目出しされて夏落葉

風薫る

鈴木玲子

薫風や浅草走る車夫の粋
葉脈の筋くつきりと柏餅
姉より届く能書付きの諸焼酎
薔薇園の日の沈みてもなほゆかし
ほの紅き青梅ぼつと雨の中

五月富士

森和子

老鶯や西行庵も遠からず
夏鶯湯けむり越しに夫の声
老鶯や女人高野の日照り雨
墨色の温泉たまご五月富士
登山電車真向ふ大き五月富士

夏本番

寺内洋子

短夜や築百年の軋む音
夏木立限界集落飲み込みぬ
鮎釣るや常は短気なあの人
明易や火勢強むる登り窯
小川にも金魚の群るる町大和

夏山の朝

西幅公子

山小屋にひしめく丸寝明易し
明易し山の馳走の山気かな
短夜や夢に峨峨たる剣岳
明急ぐ炊飯けぶる上高地
軒混声寝込む山小屋明易し

足摺岬

野村美子

足摺岬沖行く船や夏の海
雨上がり里の民家の桐の花
大阪城や落下に香る桐の花
信濃川茜に染まる代田かな
樹林ぬけ頂上近し閑古鳥

風渡る

山岸久美子

信濃宿目覚め促す遠郭公
降る光集めて咲くや芍薬花
花桐の視線は吾の足にまで
細波を為して代田を風渡る
清涼を呼ぶや白磁の夏蜜柑

亀の子

綿貫ひさの

亀の子や並びて学ぶ甲羅干し
本当は空を飛びたい水馬
時の日や今日も定時の朝ご飯
金魚来てシナモンテイの消えたカフェ
籐椅子や彼の人想ひ読む「ドージェ」

夏台風

高橋満耶子

此処彼処に葵の紋や和歌祭
制服のリボン失すや夏木立
今日の色は明日も大好き七変化
ファスナーは前に付けたし夏衣
安眠を根こそぎ奪ふ夏台風

狂ふ夏

宮崎チアキ

夏の朝採りたて野菜千切りに
隠居部屋に漂ふ香り桐の花
花桐の連なる里や京丹後
検診に備へ夜更けの洗ひ髪
相手国との条約無視や狂ふ夏

薔薇

霜多光代

門アーチ白ばらゆゑの疵ふかし
人生の午後の芳潤薔薇の嬖
新茶の香ふはりと家族どち包む
語り部の涙片手に沙羅の花
半夏生文箱さまよふ過去未来

麦

秋菅原真理

代田輝き水の国めく越後かな
緑さす長瀬駅の格天井
水張りの代田に映る里の日日
別れ際若葉の風にのる「またね」
麦秋の光を束ね風のゆく

青山椒

岡本祥子

一帯の漲る生氣若葉時
休息の影の広がり柿若葉
束縛の中で進むや蟻の列
喫驚の余韻長びく青山椒
水音の高なる川瀬梅雨の入り

新緑

岡田宣子

田植機の届かぬ隅を田植る母
新緑や弥撒を潤す聖歌隊
生涯を幾度引越す半夏生
更衣生徒浮つく一限目
小糠添へ筍捌く道の駅

オリブの花

小林京子

短夜の翡翠の指輪すつと入る
初夏の牧豎琴の音にパン起きて
オリブの花遠回りして灯台へ
逢へぬなら思ひの文を半夏雨
再会の約束果たす白夜の鳥

夏蜜柑

森下 美智枝

八高線の窓に鈴なり夏蜜柑
飴玉に右往左往の蟻たちよ
薫風や天井画龍二体舞ふ
祈りの島の巨樹這ふ蟻や二三匹
少子化の未来憂ふる子どもの日

柏もち

畑宮 栄子

柏もち葉つばに残る陽のほひ
薫風やひとみどりも心地良し
風薫るベンチのふたり長話
風薫る手足伸ばして深呼吸吸
角館人力車にも風薫る

和歌祭り

南條 きわゑ

少女らの太鼓ばやしや和歌祭
夫料る鰹たたきに盛る茗荷
童謡を歌ふ熟女や夏来る
金銀と輝くみこし夏の午後
口笛を吹きつ山頂めざす夏

夏蜜柑

野平 美紗子

亡き夫の仏壇に置く夏蜜柑
夏蜜柑器用に剥く子左利き
ペランダに夏蜜柑落ち大音響
久方の古郷の庭郭公の鳴く
夕散歩代田に映る月の影

樟若葉

湯浅 和

標縄を巻かれてでんと樟若葉
夏場所の跳ねて川風頬撫づる
五月場所きれい所が砂かぶり
老鷺を遠音に聞きつ露天風呂
鱧といふ魚の軽さ手の内に

☆

☆

『水明誌』を繙く（水明五月号）

内野義悠（「俳句同人リブラ」「俳句ネブ」リメグルク」「豆の木」所屬）

春の虹湯浴みの稚を手渡しに 石山かつ子

私事で大変恐縮だが、先日私にとって甥となるふたごの男の子が弟夫婦の間に生まれた。

そのふたりの赤子たちも沐浴をする。父である私の弟に体を支えられながら湯の中をゆらゆらと漂い、身を清められて気持ちよさそうにしている。

やがて沐浴が済むと、赤子たちは横で見守る母（義妹）に手渡され、真つさらなタオルに包まれる。

その光景は祝祭性に満ちていて、一人ずつタオルに包まれて両親の間を手渡されてゆく赤子たちは、これ以上大切なものはこの世にはないのではないのかと感じるくらい、ある種の聖性を帯びた存在に思えた。

掲句を読んだ時、まさにそのような景が浮かんだ。

この句の「春の虹」は祝福の象徴であると同時に、父と母、或いは赤子を取り囲む数多の親族の手から手を渡ってゆくその軌跡にも重なる。

愛情に溢れたその手は、赤子にとってほまさに虹の橋のようなものではないだろうか。

淡雪や墓前に話すこと多し 丸屋詠子

誰しもが一度は経験したことのある景ではないだろうか。

墓参に訪れるほど生前に繋がりの深かった故人とは、それゆえ素直に話せないことも多かっただろう。肉親ともなればむしろ気恥ずかしさが勝り、わざわざ面と向かって何かを深く話すことなど無くなっていたかも知れない。

だが、物言わぬ墓石へ向かってならためらいなく話しかけられる。いや、こちらがいくら話しかけても永遠に返事が返って来ることの無い墓石が相手だからこそ、その沈黙を埋めるために言葉を継いでゆくのだ。

時の止まったままの死者に対して、語りかける生者には日々新たな「伝えたい出来事」が積み重なってゆく。だからこそ我々は今は亡き人々に語りかけずにはいられない。

静かに降る淡雪が、その言葉の一つひとつをしんと包み込み、吸い込んでゆく。

現代俳句鑑賞

網野月を

昨日のように今日の日沈み明日は春
たんぽぽたんぽぽこんなにたんぽぽ日陰なし
亡父亡師亡夫亡友 秋桜

〔俳句〕 5月号・光の中より

池田澄子

第一句目は平穏な日常を描きながら刻々と季節の歩みがあるということを表現している。作者独特の言い回しが感じられる。いや言い回しとか視点とかいうよりも、作者ならではの文法が存在していると解釈した方が良いでしょう。第二句目は別の意味でまた作者の表現の世界を読むことの出来る句である。心の中の形象を素直に言葉にしている風である。晩年のピカソが、皿絵のジャンルで見せたあれである。第三句目は、全て漢字で表記されていて、作者には珍しいと思われる。上五中七の「亡父亡師亡夫亡友」は作者の人生そのものだ。作者ご自身は「秋桜」として存在している。

いましがたまで母とゐし春の夢

〔俳句〕 5月号・水戸より

今瀬剛一

「春の夢」の中で母と対面しているのである。こんなにも佳い夢ならば何度でも見たいものである。うつつと夢の間を交錯しているような微妙な合間を「いましがた」が担保して

いる。他に「梅園の外も梅咲く水戸であり」がある。

長靴に残る本名春深む

〔俳句〕 5月号・をばさん回顧より

北大路翼

上五中七の句意は、どうしても晩春の季節に相応しい。引越しの季節であり、また別れと出会いの季節でもあるからだ。思うにこのゴム「長靴」の内側に名を書いていたのである。

花屑をまづ転がして風起こる

〔俳句〕 5月号・桜へより

今井肖子

「風」というものは目に見えないものである。その見えないものを「花屑」で視覚的に感知しているのである。「まづ転がして」に「風」を見出した際の発見が込められている。他に「曇天へ光吸はるる桜かな」がある。

アイスクリーム美味し三三九度の夜

〔俳句四季〕 5月号・季語を詠むより

山本鬼之介

これは作者ご自身の思い出ではないだろうか。結婚式の夜に新婚夫婦で食したアイスクリームの味わいが今もって思い出されるのである。妻恋の一句である。

片陰や人間影を失へり

〔俳句四季〕5月号・松籟より

山本比呂也

「片陰」の中にすっぱりと体躯を入れて夏の日差しを避けているのである。「片陰」のできる道の片方をどうしても歩きたくなるものである。その際にふと自らの「影」を失っていることに気が付いたのである。日差しを避けた安堵感だけでなく、「失へり」に作者の気持ちの在り様が描出されている。

黍の穂や沖ノ鳥島風力五

〔俳句四季〕5月号・円座より

武藤紀子

上五の「黍の穂」の季語に対して、中七座五の句意は一読ニュースか天気予報のようにも読める。しかしながら、作者のいる地に「黍の穂」を見出すときには、遠く「沖ノ鳥島」では、という遠くの地を思いやる気持ちが込められているのではないかと勝手に解釈した。

料峭や古紙に出されし本の嵩

〔俳壇〕5月号・駒返る草より

鈴木しげを

上五の季語「料峭」は、初春の、それも夕刻の寒さというものである。と同時にこの季節の人間の別離の季節も演出している。そう考えると、これらの本の様々は、特に用はなくて「古紙」に出されるということが意味を持つのである。他に「葦牙や伊那男和生も亡き数に」がある。

愛情の色は七色濃紫陽花

〔俳壇〕5月号・丸裸より

高橋将夫

「七色」は極めて七つを指示している措辞ではない。厳密に七色（ななしよく）を規定しているものではないのである。東アジア文化圏の古来からの文化的数字の把握を象徴する数字の一つであるということだ。華々しく、多士済々という意味を含んでいると考えられる。もともと「七変化」と表記の「七」が多いという意味を含んでいると解釈した方がよいだろう。他に「丸裸しみじみ生きてをりにけり」がある。

ゆらさねばゆれぬ揺り椅子春うれひ

〔俳壇〕5月号・遠雪崩より

藤田直子

上五中七の「ゆらさねばゆれぬ揺り椅子」は道理である。「春うれひ」の中に決心を迫られる作者の何かを読み取ることが出来るだろう。而して、降りるときに揺り椅子の揺れを止めるのが難しいのである。他に「武に對ふことばの無力遠雪崩」がある。

十数えつつ薫風の息遣い

〔俳壇〕5月号・息遣いより

田中朋子

上五の「十数えつつ」はもちろん心の中で数えていても良いのであるが、「十」に重きを置くと、指を折って数えていると鑑賞しても良いかもしれない。むしろ、心の中で数えているうちに無意識のうちに指が動いて数えていて、作者はそのことに気づいてはとした、ということではあるまいか。「薫風の息遣い」は「薫風」のものと解釈しても良いだろう。擬人法である。もしくは作者が「薫風」の中で自らの呼吸を意識していると解釈することも出来る。他に「創傷の表紙ざらざら緑雨の夜」がある。

全国大会の記

青木鶴城

台風七号と八号のダブル台風の接近で全国大会の開催が危ぶまれる中、幸い小雨程度で心配したほどの問題はなく、無事にさいたま共済会館にて令和八年度の全国大会及び懇親会が開催されました。

【全国大会開会】

定刻の十二時十五分、網野副主宰の開会の挨拶の後、この一年間にお亡くなりになった井上燈女様、宇梶琢磨様、小倉倭子様、川崎道子様、鈴木香音子様、福田藤十郎様、水野興二様、山岸弘子様のご冥福を祈り黙祷を捧げました。

【主宰挨拶】

昨年九十五周年の記念大会を無事に終え、早速次の百周年の記念大会へ向け水明俳句会一丸となって準備を進めて行きたいこと、平成八年以来値上げをしていない誌代を財政上の問題から、今回値上げに踏み切らざるを得ないこと等のご挨拶がありました。

【会計報告】

日高道を総務部長より令和七年度の会計報告がなされ、九十五周年記念事業の「長谷川かな女の一〇〇句」の刊行及び会員全員への送付、パソコン導入他発行所の備品整備に多額の歳出があり、発展基金により補填をしたことが報告されました。

【句集紹介・花束贈呈】

令和七年度に上梓された句集「画布は帆」の著者の内田恵子氏ならびに、「葛の花」を上梓された松井由紀子氏の句集紹介と花束が贈呈されました。

【水明六賞の表彰】

水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞の受賞者に対して主宰より賞状と賞金及び受賞者の名前を詠み込んだ句の色紙、鼓笛賞の受賞者には大村節代氏より賞状、賞金並びに短冊が授与されました。尚、山紫賞の松宮保人氏は欠席でした。各賞の受賞者及び受賞者への主宰句は下記の通り。

【水明賞】

小林京子

京人形に山楂子の花飾りけり

菅原真理

夕顔に推理いやます真夜の庭

岡田宣子

峰雲へ宣誓高き好男子

【季音賞】

保坂翔太

太棹に逸る雷天翔る

笹本啓子

拝啓と書き中庭の梔子を

【かな女賞】

石井喜恵

恵みの大雨去りて歓喜の夏の空

鳥羽和風

薫風を連れて浦和へ若狭人

【新珠賞】

皆川更穂

稲穂波俳句の道の更なれや

穴戸洋子

大洋を目指す気概ぞ燕の子

【鼓笛賞】

森下山菜

【山紫賞】

松宮保人

(欠席)

受賞者へ各々の所属句会より花束贈呈があり、それぞれ喜びの挨拶の後、写真撮影となりました。

【委嘱状の授与】

新同人、季音昇欄同人へ主宰より委嘱状の授与がありました。対象者は下記の通り。

【新同人】

石井直子

伊藤美津子

木谷葉子

木村小麦

三浦真由美

門真宏治

(石黒由美子、菅原靖子の二名は欠席)

【季音「月」欄→「雪」欄】

内田恵子

梅澤佐江

大場順子

近藤徹平

丸山マスミ

【季音「花」欄→「月」欄】

保坂翔太

横山君夫

石田慶子

下川光子

(笹本啓子、葛城千世子の二名は欠席)

【新季音「花」欄】

小林京子

菅原真理

岡田宣子

霜多光代

湯浅和

森下美智枝

(岡本祥子、南條きわゑ、畑宮栄子の三名は欠席)

【兼題句表彰】

事前投句の兼題句「春光」、「董」、「中」の詠み込みより主宰選の三極と特選及び秀逸句の表彰があり、主宰より三極及び特選には色紙、秀逸の作品に短冊が授与されました。尚三極の発表は最後まで伏せてあり、特選及び秀逸の発表が終わった後、句が揮毫された掛け軸(青木鶴城書)を垂らし

ながら発表される演出がありました。

三極の句と作者は下記の通りで、特選、秀逸その他の参加投句は別紙に掲載されています。受賞の皆様大変おめでとうございました。

【三極】

〔天〕 未来まで見えさうな空春の色 大塚茂子

〔地〕 村中を若狭訛りで鳴く蛙 鳥羽和風

〔人〕 春光へ両手翼の一輪車 梅澤佐江

【高得点者表彰】

兼題句の高得点者の表彰があり、記念品が授与されました。投句者総数は一二三名、高得点者は下記の通りで、五明昇氏の圧勝でした。（五点以上の表彰対象者は五八名）

第一位 五明 昇 (六二点)

第二位 日高道を (二六点)

第三位 境 延昭 (二三点)

【八組以上投句表彰】

兼題句の八組以上の投句者（四一名）への表彰があり、記念品が授与されました。毎年、驚く数の投句をされる五明昇氏には頭が下がります。

第一位 五明 昇 (六〇組)

第二位 境 延昭 (三二組)

第三位 鳥羽和風 (二二組)

青木鶴城 (二二組)

【主宰の講評】

三極を始め、特選句及び秀逸句について主宰の講評を頂き

ました。時間の関係で全句の講評とは行きませんでした、主宰の講評に皆さん熱心に耳を傾けていました。

【閉会】

石井喜恵常任運営幹事より閉会の言葉を頂き、主宰の音頭に合わせて恒例の関東三本締めで、全国大会はお開きとなりました。

大会の司会を務めて頂いた、事業部の小林京子氏と日高道を総務部長大変お疲れ様でした。

【祝賀会】

全国大会の終了後、懇親会の会場を設営、六三名が懇親会のテーブルに着席。祝賀会の幕開きとなりました。

主宰の挨拶の後、五明昇氏の発声で乾杯、歓談となりました。今年のアトラクションは、山岸久美子氏のピアノ伴奏による男女の混声合唱で「夏の思い出」「上を向いて歩こう」の二曲の披露、クリアウオーターリバイバルバンドによる「笑ったり転んだり」「カントリロード」「居酒屋」「いつも夢を」「東京ブギウギ」「ロンリーチャップリン」が演奏され、出席者の飛び入り歌唱やダンスも加わり、最高の盛り上がりが見られました。

若狭から出席の鳥羽和風氏の閉会の挨拶と山本主宰、網野副主宰の三名が水明の法被を羽織り、関東三本締めにより閉会となりました。

大会の準備から運営まで多大なるご苦労頂いた関係スタッフの皆様大変ご苦労様でした。



水明全国大会 入選句

兼題

「春光」

「堇」

「中」

(詠み込み)



山本鬼之介選

【天】

未来まで見えさうな空春の色

大塚茂子

【地】

村中を若狭訛りで鳴く蛙

鳥羽和風

【人】

春光へ両手翼の一輪車

梅澤佐江

【特選】

ワングルの帽子に挿頭す花莖
我が住み処四方八方春景色
明日を待つ螺鈿の衣桁春の色
春光に水競ひ立つ梓川
春光の漲る空を鳩の群れ
春望や母が手塩の屋敷畑
花時計三時のあたり花すみれ

境延昭
森本早苗
大場順子
五明昇
五明昇
五明昇

必中の鎬矢に沸く木の芽道
家中の鉛筆削りゐて日永
春光を透く千年を抱く杉
春光を刻む風紋大砂丘
春景色野点を仕切る緋毛氈
春の雷天中殺の来る予感
春光や霊峰富士は波の上
抜け道を行けば奥嵯峨春景色
土偶みな鳩胸なりし莖咲く
春光に伸びをしさうな墳の主
陽炎の厚みの中を抜けて来し
源流の山襷立ちて春景色
包装の春の色解く誕生日
裸婦像に春光あます処なし
春光や小島通ひの巡航船
万葉の風の中行く春大和
中天に光芒蔵す霾晦
春光や万華鏡なるビルの街
汽水湖の光波の中を蜆舟
素つぴんの井戸端会議一夜草
霊峰に一礼をして重摘む
春景色パンタグラフに火が走る
山伏のひそむ背山や春の色
どの橋も春光の中水上バス

五明昇
五明昇
石井喜恵
石井喜恵
日高道を
日高道を
染谷風子
大村節代
石山かつ子
曲淵徹雄
井上燈女
飛永鼓
島津初花
星野和葉
保坂翔太
丸山マズミ
皆川更穂
菅原真理
横山君夫
大橋廸代
青木鶴城
青木鶴城
菅原卓郎
小林京子

マドンナは老いても真中春の宴

檜鼻ことは

磐座に迫る葦や川下り

反町修

中吊りは世情の鏡春の昼
春光や帆船帰る港町
春光に文字やはらかな女句碑
客を待つ中庭は今竹の秋
一夜草風の便りといふ知らせ
春景色といへば大川屋形舟
中天に唄ひつくして雲雀落つ
春光や胸が高なる窓開き
留守勝ちな交番里は花盛り
香に惹かれ途中下車して梨の花
春光の新宿二丁目夢の跡
奥路地の二坪のバーに一夜草
遠足の児等大仏の腹の中
涅槃絵の中や禽獸肩で泣く
春光や遙かに仰ぐ姫路城
春光や出航知らすドラの音
何となく背中合はせの春の宵
春景色のどかに刻を巻き戻す
女坂登ればそこは春景色
春光に白壁映えて長屋門
利根はるか春の光の帯太く
大空は素顔の青さ董咲く
中空に枝垂桜の精気満つ
春光や掌中の土いとほしく

反町 修
反町 修
熊倉千重子
菊池ひろこ
石井喜恵
日高道を
荒井俱子
福田千春
町野広子
田中弘子
染谷風子
染谷風子
森下山菜
森下山菜
森本早苗
笹本啓子
清水桂子
清水桂子
森下美智枝
森下美智枝
井上燈女
本橋稀香
本橋稀香
飛永 鼓

春光や東の筑波西の富士
繋ぎたる筏と筏春景色
遠き帆の春光の中消えゆけり
春光の中に農夫と立ち話
街中の花壇華やぐ花すみれ
花董放牧牛に添ひ寝かな
董すみれ董さがして里山へ
春光の沖へ沖へと車椅子
囀りの真つ只中に対局す
中天は昼の半月風光る
町中に疏水の響き燕来る
春の色生むパティシエの指先より
春光の風に飛びのる鮑屑
草萌や熊野中辺路日の匂ひ
春光浴び夢に遊ぶや藤寝椅子
春光や棚田に青き水湛へ
湯の街下り迫り来る海春の色
のどけしや村中の戸が開いてある
春光の一筋差しぬ杜の径
やはらかき雨音の中柳の芽
春望やはるか秩父嶺息吹きをり
春光や耳をつんざく火縄銃
古里に忘れ得ぬひと花董
春夕焼谷中に残るまだ昭和

星野和葉
松山清子
池田珪子
池田珪子
野村美子
平野 楽
飯田忠男
綿引まりこ
十倉和子
梅澤佐江
梅澤佐江
梅澤佐江
西幅公子
丸山マスミ
丸山マスミ
皆川更穂
菅原真理
横山君夫
内田章子
大神満智子
山岸久美子
大橋廸代
青木鶴城
青木鶴城
青木鶴城

花菫散りばめてゐる武者返し
 宜候の声に甲板春景色
 初燕いざなふ里へ中宿り
 束ねたる菫を握りしめ眠る
 雲ひとつなくて淋しき菫かな
 朝日射す砂の中から桜貝
 城址行く道標めく花菫
 薄明りの蔵の中ゐる春の雷
 水攻めをしのぶ堤やすみれ草
 春光や蒸気噴き上げ汽車通る
 家中の窓打つ音や春疾風
 港街余白は青の春景色
 山容の幾世変はらず春景色
 春光や能登より届くこもかぶり
 ブラウスのレースを染むる春の色
 春景色目を閉ぢてなほ春の色
 野に出でよスマホ無用の春景色
 大浅間借景にして花菫
 眼裏にタカラジェンヌや花すみれ
 太棹の語る「心中」春の月
 宙中船・UFO・子ら待つ春の丘
 春望やばんぱり揺るる川堤
 菫咲き北鎌倉に谷戸の風
 万葉の山野の雪花菫

石関六弦
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 小林京子
 小林京子
 小林京子
 小林京子
 石田慶子
 石田慶子
 近藤徹平
 倉田星歩
 倉田星歩
 倉田星歩
 菅原真理
 池田雅夫
 元田亮一
 杉浦千祐
 小山あつ子
 越田栄子
 原田秀子
 原田秀子
 原田秀子
 綿貫ひさの
 永野史代
 寺町知子
 鈴木玲子
 阿部幸代

久闊のひと春光のなかを来る
 リラ冷の中行く二人影ひとつ
 菫摘むおさが揺れて十五歳
 春光やたらい舟乗る三姉妹
 君不在されど目映ゆき春景色
 花菫すみれのやうな母の笑み
 行きつけは春夏冬中や蒸蝶
 春光や春陽のやうな人とゐて
 春光や休耕田に農夫佇つ
 朧夜の中耳にこもる謎の声
 途中下車を誘ふ菜の花夷隅線
 追分で永の別れを一夜草
 春望やマスト揺蕩ふ入江かな
 春光や魚群探知機騒ぎだす
 春光や朝湯朝酒ひとり旅
 空堀の淵に整列一夜草
 春光やゆるりと巡る屋敷跡
 夕日影八雲の墓の一夜草
 すみれ摘むネールアートのその指で
 我が庵に一灯点す一夜草
 菫咲く望郷の念とめどなく
 春光や定年退職祝ふ今日

松井由紀子
 梅澤輝翠
 梅澤輝翠
 梅澤輝翠
 梅澤輝翠
 山中みどり
 網野月を
 網野月を
 網野月を
 網野月を
 正木萬蝶
 正木萬蝶
 正木萬蝶
 正木萬蝶
 岡田宣子
 新 曆文
 河野はるみ
 河野はるみ
 石川理恵
 羽島秀子
 茂木和子
 日高道を
 松村笑風
 山中いちい

春光は小川を流れ海原へ
人生は百寿の時代春景色
巻き上ぐる錨の零春の色
すみれ咲く馬頭観音のこる道
中央口を出れば丸ビル風光る
春の塵双子部屋ある中二階
春の空ひかる野面や莖摘む
何ごとも中くらゐが良し春の宵
豪華客船春光を分け出航す
春光の一塊となる人馬かな
春光や組み上る紐ひ立つ
春光や産毛透ける稚の肌
制服の指うひうひし莖摘む
切り岸の下は荒海花莖
春望やワンデーマーチの長き列
花壇いま目覚めの時節花莖
花すみれ岬へ長き九十九折
春曉や畠中に立つ武将塚
春炬燵真中にバリの鳥瞰図
春怒濤船中で聞くおけさ節
春の塵中古デニムに箔を付け
殿中に一差舞へり昼の蝶

五五五五五五五大大大大大門佐境境境境閔閔
明明明明明明明場場場場場場真々境境境境根根
昇昇昇昇昇昇昇順順順順順順宏木延延延延千千
子子子子子子子治女昭昭昭昭惠惠

哀愁の山中節や春の雨
昭和の日に折れ帽の老教授
雲中の飛天を慕ふ揚雲雀
春嶺の懷中深くロープウエー
峠越え雨中に煙る花通草
逝く春を追うて陸中一宮
兵をしのぶ鉢形すみれ草
胸を張り球兎行進春の色
御降嫁の寄りし本陣花葦
三線に中居が踊る島の春
春光や歓声あがるブーケトス
竹林に零るる光花葦
トンネルを出て春光の大海原
春光やトタンの屋根に眠る猫
春光や乾きしまの四手網
ささめくは雛八百や闇の中
すみれ摘む城水攻めの堤跡
すみれ摘む政論ぶつは止めたまへ
蛇行する川の岸辺や春の色
やはらかに心満たしつ春景色
萼摘む我が指見つめ里想ふ
雲抱く湖面の山や春の色
土器を投ぐる俯瞰の春景色
包装紙みな美しく春の色

[illegible]

春光や安前線
妾近中

日高道を

とてたが、た黒人霊歌を

大木簀作
大寸帛弋

宣撫使の任に就いた。

下
川
光
子

只見線秘境の地にも春の色

易 淺 和

節穴を春光が刺す矢の如し
 迫り出して湖の春光浮御堂
 若緑心中益益清楚なり
 大げさな袋の中味春野菜
 菜の花の中にしやがみてかくれんば
 降りしきる桜の中の出会ひかな
 野良猫の伸びする背中春景色
 真夜中の蕾を叩く春風
 たをやかに日の落ちてゆき花重
 すみれ咲く機織る君は可憐なり
 春風や横浜中華食べ歩き
 うすぐもり山路のすみれ密やかに
 乗り継ぎて陸の孤島や春景色
 岩槻の人形供養春景色
 津浪跡残る堤に菫草
 母と子に優しき時間すみれ摘む
 春光を胸に拡ぐるペンダント
 春光を返す黒土傾り畑
 魚の尾の春光跳ぬる竿の先
 質問責めの子をはぐらかし花重
 春光や切株に座し鉄磨く
 東京湾を見渡す山や花菫
 鳥になり吉野を見たし春景色
 キューピーに射的命中春祭

鳥羽和風
 鳥羽和風
 鳥羽和風
 松山清子
 松山清子
 松山清子
 松山清子
 阿部貞代
 阿部貞代
 池田珪子
 野村美子
 野村美子
 野村美子
 平野 楽
 飯田 忠男
 飯田 忠男
 飯田 忠男
 石井喜恵
 石井喜恵
 石井喜恵
 石井喜恵
 緒方みき子
 緒方みき子
 保坂翔太
 保坂翔太
 綿引まりこ

人絶えし庭は菫の海となり
 石舞台出て春光にめくるめく
 春光へ真珠筏の照り返し
 如意輪寺めざす坂徑すみれ径
 太極拳の動きゆるやか芽吹く中
 春光や肌に艶なし鏡見る
 風が水押す春光のみづぐるま
 春光を蹴る美しきゴールかな
 春光や老舗の菓子の浅みどり
 春光を鋤き込み庭の土起こし
 春光やすりと通る針の糸
 春光や堰を越えたる水の嵩
 ひとひらの桜手帳の中に秘む
 払暁の光やすでに春光
 中流の気概いづこへ蜷汁
 喧騒の中に居りても春愁ひ
 春光を丸呑みせんと鯉の群
 花すみれ朽木のこんなところにも
 すみれ咲く咲く肩を寄せ合ふ道祖神
 走り根の懷に寄る花すみれ
 春光や三猿鎮座の庚申塔
 山深き落人の里花菫
 菜の花や帰郷の旅の途中下車
 春の色乗せて高みへ観覧車

綿引まりこ
 十倉和子
 十倉和子
 十倉和子
 十倉和子
 十倉和子
 海老名ノルン
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 梅澤佐江
 西幅公子
 西幅公子
 西幅公子
 丸山マスミ
 丸山マスミ
 丸山マスミ
 丸山マスミ
 丸山マスミ

青木鶴城 青木鶴城 青木鶴城 青木鶴城 葛城千世子 高橋滿耶子 高橋滿耶子 西浦千枝子 南條さわゑ 南條さわゑ 大橋廸代 大橋廸代 大橋廸代 山岸久美子 山岸久美子 石黒由美子 石黒由美子 境 延昭 境 延昭 境 延昭 境 延昭 太田 貴 内田 章子 横山 君夫

小林京子
伊藤美津子
石田慶子
石田慶子
近藤徹平
近藤徹平
近藤徹平
倉田星歩
倉田星歩
倉田星歩
菅原真理
森和子
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
池田雅夫
元田亮一
元田亮一

菜の花の中をゆるゆる肩車
 堇ごと抱へ重機のひだり右
 道の辺にすみれ一輪濃むらさき
 春眠や中吊揺るる身も揺るる
 早暁のそぞろ歩きや春の色
 春光や沢騒げども山黙す
 塗り立ての横断歩道春景色
 春景色高く飛びゆく紙ひかうき
 野にひとり屈みて匂ふ花堇
 春光を瞳に宿す友のゐて
 春光を浴びて列車の滑り込む
 春光や姉の影追ふ田舎道
 自転車こぐ直つ只中の花吹雪
 岩間より背伸びして咲く花堇
 金髪少女すみれのティアラつけ
 春光や汽笛尾を引く秩父線
 好日や庭に見つけし花堇
 ロープウェー春望一目賑はひて
 春景色湖畔を描く写生会
 初燕水面かすめて夕日中
 春光や病の姉の手を取りて
 ゲーテの詩忘れぬやうに堇咲く
 トンネルの先の風景春の色
 春光の橋の上からスカイツリー

室井早都子
 室井早都子
 杉浦千祐
 杉浦千祐
 秋谷風舎
 秋谷風舎
 秋谷風舎
 小山あつ子
 小山あつ子
 小山あつ子
 越田栄子
 越田栄子
 越田栄子
 越田栄子
 越田栄子
 原田秀子
 原田秀子
 綿貫ひさの
 綿貫ひさの
 綿貫ひさの
 田中章嘉
 田中章嘉
 田中章嘉
 田中章嘉
 永野史代
 永野史代
 永野史代
 武田重子
 武田重子
 武田重子

春光や古地図もとめて古書街へ
 小路より「小犬のワルツ」花堇
 春光に抜歯の憂鬱和らぎぬ
 薄皮の最中に煎茶昭和の日
 名將の威風は今も春景色
 機関車の余韻野にあり春景色
 湖畔散策背に春光の躍りをり
 春光に白鳩はなつ開会式
 用水に水巡り来て堇かな
 不意打は藪の中なる初音かな
 春光や路上ライブに客二人
 軒下にもんぺ姿や野のすみれ
 地震告ぐる夜中のラジオ春寒し
 花堇帽に飾りて若やげり
 一夜草古き図鑑を抱へ出す
 ふるさとおだやかな日日堇摘む
 丸テーブルのスワンの花器の花堇
 花の中逢ひたき人に逢ひに行く
 花嫁の空飛ぶブーケ花堇
 春光を背に浴び干すはシートなり
 尼寺の精進料理花堇
 春光や島にひとつの信号機
 愛おしや舗道隙間の花堇
 日陰地を律儀に染むる花堇

鈴木玲子
 鈴木玲子
 鈴木建治郎
 北山建治郎
 北山建治郎
 丸屋詠子
 丸屋詠子
 西幅公子
 清水美千子
 渋谷さいち
 渋谷さいち
 渋谷さいち
 阿部幸代
 松井由紀子
 松井由紀子
 松井由紀子
 梅澤輝翠
 梅澤輝翠
 梅澤輝翠
 梅澤輝翠
 樋口元美
 内田恵子
 内田恵子
 山中みどり
 宮崎チアキ

葦咲く農民党の戦跡

春光のきらめく流れ残留鴨

春光の軒に跳ぬるや道の駅

満開の桜の中に籠もりけり

枝垂桜の揺るる中庭薄暮かな

春光や黒髪さらふ風の来て

春光は天与のものよ鯉はぬる

花葦すみれのやうな母の笑み

中らない輩集ふ河豚供養

葦摘む母と娘や背の肖て

花葦園歌に唱すすみれ花

沿道の手植ゑのすみれ枯れさうな

盤中の聖目の白三月尽

春望の真中に捉ふ御山かな

街中の背高のつば花蘇芳

春節や不夜城めきし中華街

葦摘む袂の絞り染め濡らし

葦摘むイヤホンで聴くビバルディ

心中物の女形の艶や春深む

夜桜や老いの途中を君とゐて

葦摘む妻がしづかに壊れゆく

春景色しじまを破る鐘一打

春望や瀬戸内をゆく和布利舟

春光や葺き替へ屋根に夫婦鳩

宮崎チアキ

宮崎チアキ

宮崎チアキ

宮崎チアキ

石山かつ子

石山かつ子

網野月を

網野月を

網野月を

網野月を

網野月を

網野月を

網野月を

播磨 進

正木萬蝶

正木萬蝶

正木萬蝶

正木萬蝶

正木萬蝶

正木萬蝶

霜多光代

霜多光代

新 暦文

どんたくへ旅の途中の駅ピアノ

砂利を分け寸土に顔を花葦

目に耳に中韓英語春の旅

春光や好天的の中ひとり旅

飛び石の狭間に揺るる葦かな

春光やふらふらふらと知らぬ町

濃淡のすみれ少年少女めく

縁石の隙間に確と花すみれ

中高に盛り木の芽和へかぐはしく

果て迄も関東平野春の色

春光に守られ歩む通学班

春光やステンドグラスの聖母像

開発のダンブの音や葦草

若き日の袴の母や花葦

蒼天の毀れて咲くや花葦

白がちの花の中心チューリップ

ペンペン草も生家も遠し一夜草

風も柳も春光の数寄屋橋

北欧の絵を見て帰る花の中

鉢形の岩肌霞む春景色

春望や淀に揺蕩ふ我が心

忍城主見し古墳群の春望

一輪の花葦一人の詩人
試歩の脚やすます石に葦かな

新 暦文

河野はるみ

河野はるみ

飯室夏江

飯室夏江

宇都宮隆文

石川理恵

石川理恵

石川理恵

関谷多美子

稲野幸子

小野町子

小野町子

羽島秀子

横山礼子

茂木和子

茂木和子

石井妙子

日高道を

日高道を

日高道を

日高道を

榊原聰子

春光を掬ふて二丁鎌を研ぐ
若狭には古墳あまたや花重
其処だけが品位を放つ花重
三毛猫の窓辺に眠る春景色
春望や单騎で行くと決意の日
春光へびよんぴよん跳ねるランドセル
春望やかつての自分弟子のいま
今度こそ渡す恋文花重
同胞の逝きて七年春景色
目をとづる我に春光ふりそそぎ

松宮保人
松宮保人
松宮保人
松宮保人
戒能邦人
松村笑風
長谷川おにこ
長谷川おにこ
檜鼻ことは
三森恵子

*投句者一二三名、総投句数一七〇句(八五五組)、うち八組以上投句者四一名
*入選句は天・地・人各一句、特選四六句、秀逸一二四句、ほか佳作多数。

☆

☆

特集 歳時記の読み方

巻頭作品10句

星野恒彦・野木桃花・横澤放川
田口紅子・柴田佐知子・渡辺誠一郎
大島雄作・井越芳子

俳壇

8月号

7月14日発売
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
森田純一郎

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第V期」……………今瀬一博・松岡隆子

リレー連載 没後50年の俳人たち(相馬遷子)……………橋本榮治

新連載 「名句DE動画」の世界……………蜂谷一人
いま、気になる俳句の言葉……………井上泰至
地域結社の巨人たち……………渡部有紀子

風の旋律……………渡辺純枝
セビア写真館……………和田順子
編集室の風景……………森俳句会

連載 季語を考える……………仁平 勝
二度目の俳句入門……………長谷川 權
今月の句……………門俳句会

俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

句集喝采

菅原卓郎

◆山田径子「次の花火」

朔出版

著者略歴 一九五七年東京生れ。一九八〇年福永耕二の指導により作句開始。一九八五年鍵和田柚子に師事。「未来図」入会。一九八七年「未来図新人賞」受賞。二〇〇四年「未来図賞」受賞。現在「磁石」同人会長。「聞」会員。俳人協会会員。

コロナ期を挟んだ十年間の三百四十六句を収めた第四句集。有季定型かつ飾り気のない言葉で本質を突いた作品が多い。

国境のごとく罅あり薄氷

愛誓ふ錠前あまた錆びて秋

秋草の五彩頭上に白川女

ネイルアート・ピアス無縁よ桜餅

第一句、国境は時の地政学上での設定がほとんどで直線も有れば極端に入り組んだ線引きも見受けられる。正に薄氷の罅の様相である。第四句、桜餅は葉のしよっぱさと餡との頃合が良く畏まらずに素っぴんで頂く庶民派のお菓子である。

夜の雪箱を潰すといふ家事も

雛の唇とほき戦火の朱の走り

にはかなる秋冷眉を引き直す

仔犬まづ沈丁の香をくぐりけり

第二句、いつの時代のも雛人形であらうか。戦国時代の混沌世の物か将又先の大戦前の物かもしれない。その唇の色に戦争の虚しさ儚さを見出したのではなからうか。第四句、仔犬も沈丁花のあの香りが好きなのであろうか。潜り抜けた体には芳香が纏わり付いてくる。嗅覚を刺激する一句。六月十一日の読売新聞コラムの四季欄に当句集の一句「黒鯛をさきがけ」として「潮満ち来」が掲載され長谷川耀氏が潮より先に磯に寄せ来る黒鯛の勢いを評している。

◆小川美知子「冬の木」

ウエップ

著者略歴 昭和二十四年静岡県生れ。平成二年「朝」入会、岡本眸に師事。平成二十四年朝賞受賞。平成二十八年寒露賞受賞。平成二十九年「朝」終刊に伴い「菜」入会、松岡隆子に師事。令和七年「椿」入会。俳人協会評議員。

中学校の国語教師であった作者の第一句集で、教師として母としての愛情に溢れた句は非常に好感がもてる。

冬の日の何もかも干す窓ひとつ

校門の卒業の列くづれ出す

来るといふ子を持つ夜の朧かな

母ならば冬日のほひをきつと言ふ

第二句、卒業式を終え一歩校門を出てしまえば同級生と雖も各自独自の道を歩んでゆく。中七下五の「列くづれ出す」の表現に動きが伴っており秀逸である。第三句、親なればこそ的一句。朝から我が子の来訪を今か今かと待つが夜ともなれば半分諦めの境地に入る情景を季語の「朧」で上手く締めている。とは云っても来ることへの期待は失せてはいない。

三界に家ひとつある冬木の芽

仏蘭西語のやうに雨降る春の暮

炎暑にも日暮のありて米を研ぐ

むかう向く白鷺に肩ありにけり

第二句、仏蘭西語と雨では直ぐシエルブルーの雨傘を思い出す。雨のそは降る春暮の一齣を柔らかに切り取った一句。第三句、確定の助詞「て」が良く効いている。酷暑も日暮になれば米を研ぐ気にもなり一抹の涼がこの句には感じ取れる。気怠さが日暮と共に薄れてゆく流れが見えて来る。

俳誌望見

梅澤輝翠

「秋」

二〇二六年四月号 第六十六卷 第三号
主宰 佐怒賀正美 発行所 東京都練馬区

昭和三十六年十月 三好達治の指導を受けた文章会同人によつて創刊され、のちに石原八束、文挾夫佐恵が主宰

「内観造型」の理念を追求している伝統ある俳句結社

主宰句 蝶の昼五句より三句

花芽これから片栗そして二輪草

蝶の昼菌に孔あけて抜く毒素

気塞ぎの虫は健やか古稀の春

一句目 片栗から咲きその後を追うように二輪草、春の妖精と呼ばれる山野草がリレーの様に命を繋いでいく、自然の息吹が鮮やかに感じられる。

三句目 古稀を迎えられて、気塞の虫、と健やかは真逆、虫の方は退治したいものですが、その虫も今日も健やかに塞ぎ込んでいるなど客観的に面白がっているかの様です。

副主宰 小笠原 至の命 五句より三句

墓碑に命賜る戦死壺すみれ

黒塚の鬼女の序の舞雪の果

斎場の澱の水鍔に蝌蚪群るる

一句目 戦死していった若者達の墓碑の足元に壺すみれが

命を授けてもらった様に春を告げている。

三句目 斎場の人も寄らない片隅の水槽の中で蝌蚪が元気に生まれている。澱は人間の中にあるものか。死と生の対比、どちらもやさしい目差しで命をうたっている。

仮幻集 二二名 四句より一句

お湿りの埠頭にぼつり初鵬 青柳 飛

「いけません戦をしては」去年今年 足立喜美子

秋花集 五六名 四句より一句

暗殺されし祖父ブリザードに父 齋藤厚子

煮えばなの湯豆腐の無垢掬ひけり 小野裕子

秋琴集 八四名 佐怒賀正美選

ひと悶着のちのひま洩る風が好き 渡辺疲労子

無国籍のピンチヨス跳ねる降誕祭 渡部奈津子

特集 二〇二五年秋の感銘十句 十九名より三句

雪吊の男結びに日の句ひ 石井紅楓

紅薔薇が足りぬ独りで生きるには 阿部まりあ

黄落やにんげんの螺子ひとつ拾ふ 横田真智子

昨年十一月水明塾の講師としておいで頂き「俳句の豊かさ」「恩師から学んだもの」と題し文挾夫佐恵を熱く語って頂き「好奇心と信念を失わず、自分の主張すべき世界を深く豊かに表現し続けたことに我々も励まされるのでないでしょうか」と結ばれました。

山本鬼之介 選

水明集

「怪談」の続きは明日亀鳴さぬ

狢犬の阿吽に応へ亀鳴けり

薫風が添ふ千年の御神木

雨ぱつりその眼無垢なる青蛙

佇めば思ひ出めぐる夏の庭

立夏なり海迫り上がる水平線

強面も苺食む折おちよぽ口

夏座敷筆の穂先に風の音

ペーグルの穴から覗く御来光

子を守る虎の咆哮原爆忌

平塚 丸屋詠子

さいたま 綿引まりこ

篠笛を吹く人ありや月おぼろ

土間の奥里の燕と雨宿り

「ハチ公」の飼主は来ず春嵐

春の暮ダイヤル重き黒電話

悠々とフェンス行く猫暑き春

灯台に寄り掛かからんと雲の峰

川風に舟唄流れ亀鳴けり

物情の騒然として亀鳴けり

新人の部署に慣れたる卯月かな

サーカスや流るるジンタ春風に

さいたま 反町 修

利根 倉田星歩

越谷 阿部幸代

春の雷胸に去来の子の命
春時雨しだれ柳に雨宿り
三味の音の洩れくる花街夕桜
激湍が磐座けづる雪解川
相傘に胸のときめく春時雨

初蝶のふはりと三度朝^{みたひ}の庭

蝌蚪に会ふ小流れまでの草の径

蝌蚪の寄る汀に映る草の影

幾度目か父の文読む春灯下

夏蜜柑一果ためらふ齢かな

内田 章子

春灯し反古紙の束の墨の香よ

さいたま

寺町知子

春灯や人待ち顔のベレー帽
掘り起こす土塊ほろり穀雨かな
春嶺やあれに逢坂関ありし
田を渡り横笛のする卯月風

諸鳥の気配の揺らす山桜

皆川更穂

溪流へ流す微香や岩躑躅

集落に稚き声無し霾晦

落書の上に落書春埃

夕霞其処に大奥此処天守

鎌倉を落花しきりに浄めけり

田中弘子

大奥の在りし辺りか花の雨
行く春や本音はそつと追伸に
サイフォンの優しき泡や春惜しむ
蔵の街落花の中の野辺送り

桜鯛婿とる父の目に涙

上尾

室井早都子

盆栽の曲り百歳若緑

ヒトの尾の退化せしあと花の冷え

AIの笑みに化かされ蜃気楼

警策ののちの静けさ鳥交る

D51疾駆新樹の中のループ線

さいたま

森下山菜

憲法記念日柴が我が家へやつて来た
観音を埋めし湖北や麦の秋
葉桜へ「無罪」掲ぐる弁護団
独活掘りの尻にぴかりとスキットル

芳名帳に懐かしき人春の宵

本橋稀香

春愁の頬杖といて夕支度

べたべたと園児の手形鯉のぼり

この子また乱世生き抜け武者人形

モナリザも齢五百や亀の鳴く

何時の間に閉店苦味増す陳茶^{ひなちや}

大坂 遠藤人美

年輪に四季の移ろひみどりの日
剣玉の技つぎつぎと昭和の日
自転車^{ひなちや}のぴしりと並ぶ躑躅花
ネモフィラの海へ傾るる立夏かな

今日の労とろかすやうに春ともし

吉川 杉浦千祐

足踏み^{ひなちや}のスタッカートに蛸蚪散りぬ

春の月得難き夫は昼行灯

湯に溶くる懷中汁粉亀鳴けり

卯月来ぬ暦を埋むる祝事

墓碑銘や木の芽のかをる山の径
行く春や十指の触るるそばの粉
磯の香に連なる海や夏に入る
瘦せ尾根を越ゆる峠や夏に入る
前を向け気持よ我よ心太

さいたま 秋谷風舎

出支度や行きつ戻りつ春の雨
花御堂やんちやな子らも手を合はせ
花吹雪船頭唄ふ「矢切の渡し」
母眠る藤房揺るる墓苑かな
花冷の京都嵐山渡月橋

さいたま 川島夕峰

春暑し蝙蝠傘の太公望

飯田忠男

蒼天や松の緑に日と影と
母の日や病まずに逝きし母のこと

若狭 山崎郁子

あの人不起居振舞や五月晴
ロタ島の砲台目掛け卯波撃つ
白く散りまた纏ひくる卯波かな
「分電盤詐欺」の電話よ四月馬鹿

牡丹の百の花びら崩れけり
木下闇石山寺の源氏の間
孫を抱く写真の母や若楓

青田道色とりどりの児の背中

元田亮一

春雨や終バスの無きレイトショー

さいたま 吉川拓真

風薫る歩きスマホの女子高生
キスすれば薄荷の香星涼し
五月雨やハローワークの帰り道
さりげなく座席を譲る薄暑かな

春雨や袋で食ぶる芋けんぴ
春雨や膝軟骨に肉わづか
春雨やラー油で飯を食ふ男

宿下駄をこころさせて遠蛙

石関六弦

老木の全うしたる花吹雪

香田裕誌

風薫る鍋に音さす黄身ふたつ
起きたてのねぐせで卵割る立夏
見えざるも頬はたしかに初夏の風
遠足の住職肩の拡声器

紅白を巧みに咲かせ梅屋敷
春眠のままに逝きたき余生かな
春日差す出窓の主三毛の猫
般若湯膳に肴の木の芽和へ

刈り払ふ不意の殺生わぶる初夏
カッ井に釣られ田植ゑの助つ人來
川に架く鰻のぼりと鯉のぼり
風青し若葉マークの横転車
殺し屋を語る役者や青嵐

若 狭 松村笑風

行く春を追うてみちのく白河の関
行く春や低山登頂杖二本
我が子猫売れ残りなるべつぴんさん
猫の子に一時停止の三輪車
茶摘み歌心通はせ手さばき合はせ

さいたま 門 真宏治

巫女舞の千早装束夏近し
浦安の舞の天冠マーガレット
古寺の軋む回廊梅雨の闇
やるせない知覧特攻男梅雨
夏近し北アルプスのシャングリラ

若 狭 畠 中風花

さくらんぼ双子姉妹は仲が良し
薫風を孕みて泳ぐ親子鯉
語り部の声の若さよ風薫る
挑戦の山そびえ立つ立夏かな
母と子の揃ひの白き夏帽子

森下 風湖

素つぴんで歩く川べり花ぐもり
善人を演じし後の春の風邪
自転車を押して坂道花ぐもり
女子会や花水木の見ゆる席
見えぬ目で見るその先の花水木

川 口 新井のり子

注意書張られて咲くや花水木
一推しの演技派女優紫木蓮
万歩計に疲れを残し花ぐもり
臍出しの娘ちらほら夏来る
菖蒲湯や弾む会話の父と子と

木村小麦

白牡丹年号三つを生き抜きて
里山は若葉の最中濃き薄き
村の児の日毎伸び行く柏餅
境内の薄闇ぼつと著我の花
草笛をピーと嬉しき下校の子

若 狭 西川夕月

ひめゆりの塔に誓ひを沖縄忌
沖縄忌「一度と」を胸に塔仰ぐ
白鷺や農夫の側に脚沈め
牡丹や言はずともある胸の内
夏浅しお悔やみ欄に知人の名

佐野友夏

池の端予定なき午後春の鴨

二人ならここに幸あり春の鴨

呼び声に試食をつまむ春の昼

推敲に「t」の字連打春の昼

デジャヴに軽き目眩を春の昼

桜蕊降る一角に猫の道

電波塔の光ぼやけし春嵐

八十路行く二人へ咲けるアマリリス

退院の日の延びにけり四月尽

一人づつ仕上げのノック麦の秋

木道に去年の葦伏せ水温む

なけなしの知恵を試され四月馬鹿

あのひとも佳き人に見ゆ万愚節

春陰の名代の蕎麦や異人群れ

一枚を羽織りて春の泊かな

富士山を燻し裾野の草を焼く

急降下家路を急ぐ夕燕

加賀平野遠山けぶる穀雨の来

納屋で書く作物日誌穀雨かな

茅茸きの山門くぐる花ふぶき

東京 山中いちい

さいたま 鈴木藻好

小山 泰生

石黒由美子

暮の春金剛像の阿吽かな

行く春や惜しむ間もなく婚の報

猫の子を貰ふごとしや入籍す

鞆轡を漕ぐや届かぬ願ひ事

後悔は一瞬なりや四月尽

緑濃き^{いづみ}和泉山系神宿る

華奢な娘の押す車椅子風青し

ラベンダーの香を独り占む白昼夢

リラ香るこの道今も夫の声

新茶の香尖る会話を包み込む

葉を揺らし木霊通りて穀雨かな

行く春や岩に石亀しがみつく

近くとも遠足行くと云ふ園児

隅田川かつて遊女の遠足場

猫の子やソプラノに鳴き母を呼ぶ

閉店の間際ほうばる白子丼

笑顔なき新社員かな後退り

花林檎盆栽仕立てにして華やぐ

花の芽に犬がじやれつく弥生かな

花散るやににく米菓閉店を

さいたま 木谷葉子

和歌山 嶋田洋子

さいたま 平野 楽

小川 洋子

三 郷 戒能邦人

肌だとして肌に逢ひたき春の宵
道草や金木犀の匂ふひと
手揉み茶や手伝ふ子等の手は真つ赤
亀鳴くもわが耳鳴りが寄せ付けず
亀鳴くや空飛ぶ夢を見なくなり

さいたま 阿部貞代

行く春や少女が抱く膝頭
大潮の恵みごつそり汐干狩
名刹の青き権現山桜
富士眺む田島ヶ原の桜草
行く春のカーテンコールソワレかな

川 口 澤田たみい

春の日や主役演ずる得意顔
花曇顔の調子がいまひとつ
春の昼ヘルパー演じ母に寄る
青き空新庁舎へと花水木
花曇学童帰りの一年生

さいたま 石井直子

行く春や東京タワーどつしりと
歩み来て膝に子猫の寝息かな
若葉風俳句に恋し無心なり
捨てられぬ鍋の出番ぞ筍よ
雨去りて黒き田畑や花の塵

さいたま 大神満智子

沈みゆく夕日の中の野焼あと
走りきてぶつかりながら猛る野火
山桜生れし子牛やつと立ち
自転車の子ら一列に春の土手
早朝のこむら返りや春の雷

北出久美子

春月が庭水忘れし吾を笑ふ
海螢と勝負は如何に螢烏賊
断末魔の光妖しき螢烏賊
螢烏賊光らせ給へ駄句凡句
靖国の森の真上に春満月

大 阪 海老名ノルン

朝掘りの筍の香の店に満つ
職人のきびきび動く立夏かな
夏立つや浴室解体音高く
更衣変はらぬサイズ喜びぬ
バードウィーク鳥に負けじと女声

さいたま 播磨 進

羽筆り任された子の夕端居
裸児や風呂から居間へ玄関へ
病み明けの朝に溢るる白牡丹
行間に思ひを馳せて冷し酒
冷麦の物足りなさなつかしむ

夏めくや沼面に淡く魚影過ぐ

さいたま 伊藤美津子

緑陰に小さき背中見え隠れ

木下闇羽音鋭く虫過ぎぬ

明易し音軋ませて電車発つ

染め抜きの背文字躍るや夏祭

積読の今日も今日とて夏来る

巡礼の一期一会や五月晴

アラームのテンポは早し夏来る

いつの間に木陰が伸びて夏に入る

黒森山泉の響く岩屋かな

月を食み鶴の鳴く夜や星落つる

ヒョーヒョーと生胆抜くや鶴の声

麦の秋ガラスの霜や赤ラベル

君思ふ千千に乱るる麦の秋

夕暮れて俯く影や麦の秋

草加 持永喜夫

春の朝クロワッサンにカフェオーレ

緑色に和名とりどり若葉萌ゆ

「ともだちひやくにんできたよ」一年生

空缶に忘れられたる蝌蚪二匹

山藤の高きに咲ける木曽路かな

東京 清水美千子

目標の夏木は遠し松葉杖

さいたま 緒方みき子

「よいいどん」本気のフォーム夏木立

前撮りの笑顔も二倍夏木立

灯台の内でのびのび燕の子

何時の世も腹一杯に親燕

ローギアで踏み来し峠風光る

一輪で芍薬トイレを制圧し

踏まれども踏まれどもウクライナなほ麦の秋

麦こがし味の記憶も遠くなり

美人画のポーズ真似して夕涼み

所沢 飯室夏江

裏富士の左に西湖夏木立

空になき境界線や夏木立

果て何処北の大地の夏木立

早口の返事ばかりや親燕

古民家の軒の合唱燕の子

さいたま 羽島秀子

図書館に春眠の人またひとり

春眠の母の微笑み夢の父

オルガンを囲む子たちや芽吹きたり

点点と石州瓦麦の秋
泣きべその子と手をつなぐ麦の秋

海原を的に陽光夏始

ひいーひよーと鶴の鳴く夜に「乱歩」読む

ジャスミンやをんな目覚むる老女かな

流木に晒す甲羅や首夏の波

初夏の朝陽洩れ出す障子かな

大 阪 飯塚智恵子

北有りて南の有るや夏の星

籐寝椅子翼を広げ小旅行

乾杯の泡の弾くる生ビール

思ひ出は鏡の中へ衣更

子供の日夢は未来へ発ちにけり

所 沢 関根千恵

初鰹猫は横目で背を丸め

大小の夏帽子行く峠道

夏草や風神雷神どよめきて

峠道枇杷を両手に少年来

牛の道ゆるき登りや枇杷たわわ

さいたま 山下ユリ子

抄つても抄ひ切れない螢烏賊

螢烏賊身を投げ出して明滅す

沖漬に生きる道あり螢烏賊

離島の影に流人船かな春の月

筆を置く式部の影か春の月

北山建治郎

木苺みな小学生の口の中

悩ましき味噌餡を買ふ柏餅

緑陰や玄関で売る手焼き菓子

ツボ押し of 修業始まり風薫る

遊船や酔ひ続けたる夜の舳先

横 浜 石井妙子

夏セーターひよいと私に着せた人
余命とは明日明後日夏隣

薫風や補助輪はづし明日を漕ぐ

種蒔きし小鳥の声に鍛洗ふ

ヨーチンを塗る膝小僧聖五月

さいたま 森田克己

芝桜バレエレッスン最初の日

ウォーキング七千歩越ゆ揚雲雀

つばくろは分度器型に忙しげに

チューリップ抗ひつくして最期かな

魚の眼のいよいよ透くる穀雨かな

清山尚己

春の野に出で時忘れ我忘れ

花殻を摘む母の背や春日入る

春惜しむ命つなぎてまた会はむ

春驟雨はじき駆けゆく制服の子ら

帰り道景色新たな春の暮

三森恵子

うららかや散歩の稚に「こんにちは」

さいたま 武田重子

七輪の真つ赤な炎鮑の香
春昼や飼犬と行く老夫婦
春の昼食後の卓にまどろむ吾
両国の街に活気の五月場所

春眠やページすすまぬミステリー

樋口元美

春眠やモテ期到来夢語り
木の芽晴バターの溶くるパンの朝
木の芽風地上に空の多角形
亀鳴くや若しくはただの空耳か

薫風や銀座の画廊賑はへり

小野町子

みゆき通りひとつばたごの花散りて
待合せ葉柳揺るる数寄屋橋
風青し泰明小のアーチ窓
アルマーニの制服似合ふ一年生

境内に集ふ拳友立夏かな

稲野幸子

炎帝に演武奉納二百人
緑蔭や鉄橋抜けて塔の空
新じやがを母のレシビの夕餉かな
夏風や指に残りしハ短調

さいたま 関久美子

行く春のひかうき雲を曳き連れて
行く春や百花繚乱置き土産
早咲きの心許なき芥子の花
猫の子の瑠璃色の眼よ平和なれ
十五年母亡き母の日合掌す

宮代 関谷多美子

永住の団地躑躅に彩られ
亡父の蔵書二巻目を手にする五月
美術展へ家族集合五月晴
真白なる芍薬花芯濃き茜
太極拳ツアー芍薬咲く上海

鬼石 榊原聰子

鳥声や野辺に四つ葉のクローバー
柏餅餡は三種よ子供の日
新色のランドセル決め五月かな
葉桜や出会ひがしらに犬と犬
吹流家紋堂々ひるがへり

東京 桐山遊童

吹き流す鯉を見ながら父に会ふ
昨晩の酔をさませし蜆汁
山あひの火を鎮めたる今日の喜雨
雨を待つ青水無月の田圃かな
こんにちは今年も来たか初の蝶

一迅の風藤房揺らす町廃れ
食ぶることおつくうになり卯の花咲く
門の藤母の帰りを待ちにけり
鉢の藤母に届けて帰る道
白藤の香り仄かな夜道かな

東京 中村まどか

我こそと湧き上がるいのち穀雨かな
ラッシュアワーぎこちなき人消え穀雨

さいたま 森田恵美子

花粉症いたはりあへり電話口
盆栽の苔つきをりて木瓜の花
木瓜の花情熱のルンバ口遊み
朝採りの筍湯がく大鍋で
甲冑は床の間に座し睨みつけ

さいたま 田口文子

潤ひて飢え凌ぎたり穀雨かな
遠足のわくわく園児日和田山
魚突く鳥の嘴春の色
紫陽花や夢の広がる虹色よ

榎本道代

母の日や今日といふ日が贈り物
届いたよ真つ赤なトマトが母の日に
室外機おおふ露刈る婆一人
豆の花雨のつぶてに負けず咲く
木のでつぺんやつと一輪山帽子

藤沢 小島喜代子

子猫六匹名前代りのリボン付け
猫の子の両手にくるむ軽さかな
心字池繋ぐ朱の橋青葉風
青梅や蒂取る母のごつき指

三浦真由美

春眠や相似形なる猫と夫
春眠や眠り姫ほど眠りたし
春眠しメビウスの輪の夢を見る
急登の堇一輪空の色
木の芽摘みむすびにのせる山ごはん

さいたま 横山礼子

高値つく子猫寝転ぶ異空間
良く食べて良く寝る愛し子猫かな
春行くや駅さまざまの薄着かな
五七五心解くや春の暮

西窪弘子

問ふごとく花をかすめて朧月
幸福のしらべ流るる雪柳

時の音の消ゆるばかりの朧月
匹如身すゝみみの夫婦に子なく雪柳

行く春や運動靴にほつれあり

行く春やゆきつもどりつ遊歩道

猫の子や顔中乳の溢れたり

夏近し心変はりやスケジュール

筍飯母に供へて願ひ言

挿木から白薔薇咲くや友の顔

薔薇を見に明日帰る娘と来てをりぬ

八十路すぎ初恋の名の薔薇と逢ふ

金 沢 小島つぶ金

さいたま 今西 操

菅原靖子

☆

☆

「りんどう忌」のご案内

【日 時】令和8年9月27日(日曜日) 午前11時受付
午後1時開会

【会 場】浦和コミュニティーセンター 10階 第13集会室

【投 句】2句 兼題：りんどう忌(かな女忌)、鰯雲(鱗雲可)

【参 加 費】1,000円(昼食はありません、飲み物は各自で持参してください。)

【申 込 み】9月15日(火)までに申込書に会費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

◎ 今年(令和8年1月～12月)に米寿(88歳)及び喜寿(77歳)を迎えられる方でりんどう忌の参加者に記念品を贈呈します。申込時に自己申告してください。

※ 状況によっては内容を変更する場合があります。

申し込みの無い方の入場はできません。

※ 参加申し込みの方で、当日急遽欠席の場合は、下記までご連絡ください。

事業部部长 青木 鶴城
090-6709-1367

作品鑑賞

山本鬼之介

佇めば思ひ出めぐる夏の庭

丸屋詠子

句意が至極明快で何ら思考を巡らす必要の無い俳句であるが、それだからこそ、ひと文字ひと文字に作者の半生の想い出が凝縮しているように思う。まだ物心のつかない幼児の頃、大阪市から遠く離れた埼玉県の浦和市に転居し、幼稚園から小学校へ、そして、学生時代から会社勤めを経て嫁ぐまでの二十余年間をこの地で暮らしてきた作者である。その間、接してきた多くの人や場所を通して沢山の想い出があるのだろうが、作者にとっては、自分が色々な事物に触れながら日々接してきた実家の庭にその想いが凝縮しているのだと思う。

春の草花、夏の手花火、秋の虫の声、冬の雪だるまなど、

四季折々の出来事が走馬燈のように廻り巡ってくるのだらう。

夏を迎えた某日、庭に下り立った作者の胸の内に、数十年間の出来事が一気に甦ってきたのだと思う。作者にとって心の安らぐ一句であらうし、また、筆者にとっても同様である。

夏座敷筆の穂先に風の音

綿引まりこ

本句を読んで「風雅」という言葉が脳裏を過ぎった。手入れの行き届いた庭に面した座敷に正座して筆を取っているひとの姿が眼に映る。「穂先」という表現から細筆を連想するが、書いているのは流麗な仮名文字か、あるいは、写経であろうか。筆を持つ手に、庭から座敷を通り抜けてゆく微風を感じている。それを、「風の音」と捉えたところに作者の繊細な心の動きを感じた。

春の暮ダイヤル重き黒電話

阿部幸代

その昔、一般家庭や会社、役所などで広く使われていた電話機である。そのイメージを簡潔に表せば「重たくて頑丈」で、ゆっくりと回るダイヤルは、アナログ時代を代表する存在であつたろう。現代の若者や子供がそれを見ても何をする器具なのか判らないという逸話を聞いたことがある。今、販売されている電話機はプッシュホン式であるし、固定電話を設置しない家庭も多い時代であるから、当然と言えばその通りで、むかし人間の常識は通用しないのであろう。

さて、嬉しいかな作者は昔の黒電話機を今でも愛用されているように受け取れる俳句である。筆者も、かつて使ってい

た黒電話のダイヤルがスムーズに戻らず、強引に戻して使っていた経験があるので、「ダイヤル重き」の言葉が、その當時を鮮やかに甦らせてくれた。

サーカスや流るるジンタ春風に

倉田星歩

広辞苑で「じんた＝ジンタ」を引くと、「大正の頃、サーカスや映画館の客寄せ、広告宣伝などに用いた通俗的な楽曲の吹奏楽」という内容が書かれている。そして、それを代表する曲が、明治35年に発表され、日本で最初のワルツと伝えられている唱歌「美しき天然」である。ジンタのあの切れの良い三拍子の「ズンチャッタ・ズンチャッタ」のリズムを、子供の頃のサーカスの客寄せや、チンドン屋の宣伝で聞き馴染んだ記憶があるが、チンドン屋は今なおこの曲で街行く人を惹きつけているようだ。

サーカスは過去のもと思っていたが、調べてみると百年以上の業歴を持つ木下サーカスを筆頭に、日本でも幾つかのサーカス団が高度な技術を取り入れて今なお各地で人気を博しているようだ。掲句のサーカスは現実のものなのか、それとも、テレビや映画などの映像的なものか、または、ジンタを引き出すための象徴的な言葉として配置されたのか判断しかねるが、春風に乘ってジンタの曲が作者の耳に届いたという発想に大いなる浪漫を感じた。

春時雨しだれ柳に雨宿り

反町 修

駅中のショップや街のスーバー、コンビニなどで簡単に傘が買える現今において、よほど急な雨でないかぎり雨宿りする機会が無くなっただけに、懐かしく、また、優雅な響きを持った俳句だと思う。沢山の枝を垂らした柳の繁みに隠れるような雨宿りだからスリルがある。柔らかな春雨と枝垂柳の取合せは実に艶治である。

幾度目か父の文読む春灯下

内田 章子

むかし、嫁ぎ先に実父から届いた手紙であろうか。今では封筒や便箋の色が変色し、全体がくたびれた様相を呈している。それだけ何度も読み返した証である。書かれている文面は、他家の人になった娘を気遣い、そして、婚家に溶け込んで夫や舅・姑に尽くすよう諭したものであるうかと推察する。その内容は、実家に居た頃には示したことの無かった父の慈愛に満ちたものである。

既にその実父も他界して年数が経った今も、時々古い手紙を取り出して読みながら、涙を滲ませる作者である。

春灯や人待ち顔のベレー帽

寺町 知子

駅の改札口が駅舎の入り口、或いはどこかの店先であろう。目線を巡らしたり背伸びしたりして誰かを待つ素振りである。街の中で帽子を被っている人は多いが、ベレー帽の人はあ

まり見ないので人目を引く。ベレー帽は、そのかぶり方によつてその人の職業や性格が何となく伝わってくるので楽しくなる。春灯がベレー帽を照らして一段と込み入った雾囲気を演出しているのではなからうか。

集落に稚き声無し 霾晦 皆川更穂

集落の文字から限界集落に結びついてしまふし、本句の句意からしてもその意味合いが濃いと思う。春季の季節風によつて大陸から飛来した黄砂によつてどんよりと濁った空模様と、若者や子供の声が聞こえず、外には人を見掛けない集落であるから、これ以上の陰鬱さは無いという極限の状態を鋭くそして的確に表現した俳句である。

蔵の街落花の中の野辺送り 田中弘子

蔵の街と称される処は全国に何カ所があるが、何処も歴史に育まれた風格を備えた街である。桜が満開を迎え、ちらほら散り始めている。終局の花吹雪も見事であるが、その状態になるまでの落花が味わい深い。

さてこの句の「野辺送り」をどのように解釈するか。単に葬式とも受け取れるが、蔵の街という前提があるのだから、映画でみた昔の野辺送りに近い雾囲気の葬儀であつてほしい。さすがに白の幟旗は持たないまでも、親類縁者が棺を担ぎ、火葬場まで静々と行進する情景を思い描きたくなる。霊柩車で運ばれて行く棺では絵にならないし、作者の本意ではない

と思う。

警策ののちの静けさ鳥交る 室井早都子

禅寺で修行僧が、また、一般人の体験希望者が座禅しているところをゆつくり見廻っている僧が、時折警策で修行者の肩を叩く。「ぴしっ」という乾いた音が何とも小気味よく、

その音の後の静けさが何とも心地よい。求愛の時期を迎えた雄鳥の鳴き声とその静寂を破ることになるが、その雑念を振り払い、禅に没頭するのである。作者も座禅の体験者であろうか。

D51疾駆新樹の中のループ線 森下山菜

「ループ線」とは、急峻な地で、勾配を緩和するために螺旋状に施設した鉄道で、D51は、日本国有鉄道の前身である鉄道省が設計製造した蒸気機関車で、愛称「デゴイチ」で多くの人に愛され、今なおその雄姿を見られる路線があるとのこと。瑞瑞しい若葉に包まれた急な斜面を、力強い音を立て、もうもうたる煙を吐いて力一杯昇って行くD51の姿が眼に飛び込んでくる。

春愁の頬杖といて夕仕度 本橋稀香

窓際で頬杖を突き、物思いに耽つていた。春だから特別にということではないが、いろいろと思ひ悩むことがあったのだろう。陽が傾きはつと我に返つて台所へ向かう作者であつ

た。何でもない日常の一齣に、春愁というちよつと厄介な季語を然り気無く絡めた俳句だと思ふ。

年輪に四季の移ろひみどりの日

遠藤人美

四月二十九日のみどりの日に先立つ一週間が緑の週間で、日本各地で植樹祭や植樹式が行われる。山で、伐採された木の断面を見て、永年に亘って自然が作り上げた年輪の神秘に、今更ながら感動したのであらう。

今日の労とろかすやうに春ともし

杉浦千祐

早出の勤務でくたくたになつて家路を辿り、帰宅して早々に遅めの夕食を摂る。入浴して疲れを癒やし、やつと腰を落ち着けた。何の変哲もない春の灯火であるが、疲れた我が身を揉み解してくれるような嬉しい明かりである。「とろかすやうに」が作者の純な気持を飾ることなく言い表している。

行く春や十指の触るるそばの粉

秋谷風舎

蕎麦打ちではプロ級の腕前と聞いている作者である。自らの十指を余すことなく自在に使いこなしてこそ納得のゆく美味い蕎麦が仕上がるのであらう。勿論吟味した蕎麦粉をはじめとした材料の準備や水加減など、いろいろな技があるのだろうが、何と言つても己の十指が強い味方なのである。

春暑し 蝙蝠傘の 太公望

飯田忠男

近年の気象変動で春とは言え結構暑い日がある。湖畔や沼

の畔、釣堀などで黙々と釣りをしている人がある。日除けのためと万が一の降雨に備えて、大きな蝙蝠傘を差している。はてさて、釣果は如何なものであらうか。

さりげなく座席を譲る薄暑かな

元田亮一

戸外に出ると少し暑さを感じる日。乗った電車で座っている自分の前に老人が立った。弱者用の優先席ではないので、席を譲らなくてもよいのだが、何となく気持が落ち着かない。まだ降りる駅ではなかったが、その人に「次で降りますから」と声を掛けて席を譲った。

宿下駄をころころさせて遠蛙

石関六弦

温泉宿で一風呂浴び、夕食後の腹ごなしに散歩に出掛けた。久しぶりに焼印の入った宿下駄を突っかけ、気の向くままに歩を進める。やがて長閑な景が広がり、遠く近くから蛙の声が届いてくる。蛙も下駄も「ころころ」である。

花冷の 京都嵐山 渡月橋

川島夕峰

桜が咲いたのに急に冷え込んだ日のこと。外国人も居る観光客に交じつて渡月橋を渡っている作者を思い描く。上五のやわらかな導入から渡月橋までのリズムのよい言葉の幹旋で、京都の旅心が膨らんでくる。デュークエイセスの「女ひとり」の「京都 嵐山 大覚寺」の歌声が聞こえてくるようだ。

水 琴 窟

(水明集六月号鑑賞)

池田雅夫

菜畑の香り 膨よか風に色

香田裕誌

菜種油を採るために栽培される菜の花。見渡す限りの菜の花畑。黄一色の畑は眩しいほどである。暖かい日射しに照らされた菜の花は独特の香りがある。風に漂うその香りを「香り膨よか風に色」と詩的に詠んでいる。なるほど、ふくよかな香りが色となって風に漂っているように思えてきた。

金箔や海鮮丼の螢烏賊

吉川拓真

俳句では「螢烏賊」は動物に分類されているので、本来はその生態で詠むべきであろうが、歳時記によつては店頭に並ぶものや美味であると記しているものもあるので「海鮮丼」もその範疇であろう。「金箔」がのせられた海鮮丼とは、いかにも美味しそうである。一杯飲みたくなるのも当然。

公魚や湖水の下に眠る村

阿部貞代

水力発電のために多くのダムが建設され、そのために村が水没し高台に移転したところも少なくない。そうした「湖水の下に眠る村」の犠牲の元に今日の電力万能の社会がある。「公魚や」の詠嘆にはそうした思いが込められている。

春泥や小さき靴跡ここかしこ

播磨 進

凍てついた土がゆるみ、雪解けなどとともにぬかるみとなった状態の「春泥」。ぬかるみは一年中あるが、とくに春を迎えた喜びと土の感触の愛着が春の季語「春泥」として定着したのだ。幼い子が遊んでいたので「小さき靴跡ここかしこ」に残っている。その発想、描写は申し分ない。

瀬切れなる川に雑草残る鴨

武田重子

浅瀬がしだいに岸に近づき、草の生えた川原となっているのだろう。そんな「雑草」の茂みは鴨の恰好の棲み処、隠れ処である。春深くなつても北方へ帰らず「残る鴨」となるものもある。きつと餌が豊富で安全な場所なのであろう。中州であつたり、支流の合流点であるかも知れない。

女学生の頃の話や春の母

石井妙子

「春の母」に驚いた。「春の人」はあるものの、こんな大胆な使い方はじめてである。母がまだ「女学生の頃の話」を聞かせてくれたのだろう。時代は昭和。高度成長期といわれ何もかも目新しい母の青春時代が「春の母」に重なる。

貴方から出直すための衣更

関根千恵

意味深長というべきか、大胆というべきか。一体、何があったのだろうと、いろいろ詮索してしまう。気分転換のための「衣更（更衣）」などと軽々に片付けられない何かを感じる。その決断が人間を一回り大きくするのである。

赤ちゃんの下の歯二本水温む

三浦真由美

「赤ちゃん」の歯は「下の歯」から生え初める。成長の証として歯を用いたのだ。〈萬緑の中や吾子の歯生え初むる〉（中村草田男）の句はあまりにも有名である。掲句は「水温む」を引き合いに引用している。生命の根源を示している。

正客に招かるる婆雛の宴

鈴木藻好

雛祭は「桃の節句」ともいわれ、女の子の幸せを祈って行なわれ、延命長寿を願う桃源郷の話につながる。内裏雛や七段飾りなど、時代とともに形態も変化してきた。その雛祭の「正客に招かるる婆」にはこの上ない宴であつたことだろう。

春炬燵いまでも夫のあるやうな

海老名ノルン

春になつてもまだまだ油断できない寒さ。炬燵に頼ることが多い。いつもごろごろと炬燵から離れなかつた亡夫を思い出すのであろう。そんな思いを「春炬燵」に託している。

大甕にどんと活くるや花辛夷

小山あつ子

山地に自生する「辛夷」。葉にさきがけて咲く白い花は、やや小さめであるが木蓮に似た花が群がって香氣がある。野趣に富んだ辛夷であるから、活けるにはやはり「大甕」でなければならぬのであろう。句の迫力にも圧倒される。

初場所や小兵力士の土俵際

戒能邦人

若手力士の活躍で大相撲人気は好調である。「小兵力士」の字良、翔猿、五月場所に十両に復帰した炎鵬などの動きの速さや柔軟な脚腰で堪える「土俵際」。多彩な技も見ものである。際どい土俵際に、ケガをしないよう願っているのだ。

ほつとせし妻の寢息や春の雨

小島つづ金

「ほつとせし」は、誰が、と疑問が残る。しかし、「妻の寢息に」と理解した。何か問題でもあつたのだろうか。それも解決して今はやすやすと寢息をたてて眠っている。「春の雨」の情のこまやかさが心境を表わしているように思う。

雛祭ひらがなだけの案内状

田口文子

三月三日の「雛祭」。核家族化で雛祭の行事も簡素化されているようだ。幼い子からの「案内状」であらう。たどたどしい「ひらがなだけの」に心打たれる。表記にも工夫を。

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和八年六月三十日現在 —

新 曆文	10	口
佐々木史女	10	口
田中弘子	2	口
戒能邦人	10	口
石井喜恵	10	口
菅原靖子	6	口
鳥羽和風	50	口
高橋満耶子	5	口
西幅公子	10	口
西浦千枝子	10	口
石川理恵	10	口
嶋田洋子	5	口
内田章子	3	口
石井直子	3	口
飯室夏江	3	口
田中章嘉	5	口
村杉清吉	3	口
日吉亜弥子	20	口
松井由紀子	10	口

宮崎チアキ	3	口
小林京子	50	口
湯浅 和	0.5	口
葛城千世子	5	口
寺町知子	3	口
大橋勉代	10	口
十倉和子	10	口
宍戸洋子	10	口
南條さわゑ	5	口
西川夕月	10	口
森下美智枝	10	口
榎本道代	5	口
菊池ひろこ	20	口
全国大会より		
青木鶴城	2	口
荒井俱子	2	口
池田珪子	1	口
石田慶子	5	口

内田章子	2	口
梅澤佐江	30	口
大場順子	2	口
緒方みき子	3	口
越田栄子	5	口
菅原卓郎	20	口
染谷風子	1	口
西幅公子	1	口
日高道を	3	口
日吉亜弥子	1	口
保坂翔太	2	口
正木萬蝶	5	口
丸屋詠子	2	口
秋谷風舎	1	口
飯田忠男	10	口
石関六弦	1	口
伊藤美津子	1	口
内田恵子	5	口
大塚茂子	5	口
大村節代	2	口
倉田星歩	5	口
清水桂子	1	口

鈴木玲子	3	口
永野史代	10	口
畑宮栄子	10	口
平野 楽	1	口
福田千春	5	口
曲淵徹雄	2	口
町野広子	5	口
丸山マシミ	2	口
皆川更穂	1	口
茂木和子	3.5	口
森 和子	2	口
下川光子	1	口
菅原真理	2	口
森川義子	3	口
宮崎チアキ	1	口
本橋稀香	1	口
湯浅 和	2	口
若狭水明会	10	口
河野はるみ	2	口
— 合計 —	511	口

網野月を選

山紫集

麦秋やヘリコプターのよく飛ぶ日

石田慶子

麦の秋シャンソン唄ふバガボンド

渋谷きいち

麦秋や研ぎの看板道しるべ

野村美子

手の温み残して帰る麦の秋

持永喜夫

彼の人の足跡辿る麦の秋

日高道を

麦の秋トランペットの空に向く

梅澤輝翠

長すぎる釣竿たたむ麦の秋

遠藤人美

嬰兒抱く胸乳豊かに麦の秋

山中いちい

麦の秋黒ん穂でひげガキ大将

河野はるみ

穀倉に積まるる武器や麦の秋

青木鶴城

城山の昏き隘路や麦の秋

秋谷風舎

不器用な生き方誇る麦の秋

新 暦文

麦秋や詰襟が行く田舎道

阿部幸代

麦秋やゴッホを目差す豆画伯

荒井俱子

麦の秋日の落ちてゆく吉野かな

新井のり子

麦秋やビール勧むる穂のさやさや

飯田忠男

麦秋の少女の弾くピチカート

池田珪子

麦秋や郊外をゆく地下鉄道

池田雅夫

——以上特選

どこにでもゆるキャラのゐる麦の秋	石関六弦	風運ぶ電車の音や麦の秋	清水桂子
乗り越すや車窓一望麦の秋	梅澤佐江	車窓より低き山並麦の秋	下川光子
下総を占むる空港麦の秋	岡田宣子	麦の秋孤愁あふるる佐久平	霜多光代
モルツクの熱き戦ひ麦の秋	川島夕峰	リヤカーの尻に老婆や麦の秋	菅原卓郎
ペルソナも色付き染まる麦の秋	北山建治郎	しやかりきに銀輪漕ぐ子麦の秋	菅原真理
麦の秋胸に琥珀のペンダント	熊倉千重子	稔り待つ武蔵野うどん麦の秋	杉浦千祐
麦秋や畠の先に雲立てり	倉田星歩	さざめきし風のお喋り麦の秋	鈴木藻好
豹瘦せて背骨の乾く麦の秋	小林京子	野球帽の兄いもと行く麦の秋	鈴木玲子
艦載機に隠れし記憶麦の秋	近藤徹平	乞ふ地上に戦争無きを只麦秋を	関谷多美子
八十代壁ありと聞く麦の秋	榊原聰子	バゲットにクリーム・チーズを麦の秋	染谷風子
補助輪が取れて通りへ麦の秋	笹本啓子	麦秋や穂波に乗りて一輛車	反町修
入り日射し苺りいそしむや麦の秋	篠原さよ子	家族葬の内覧会や麦の秋	高橋満耶子
びんころりの話賑やか麦の秋	嶋田洋子	麦秋のさざ波残し風去りぬ	武田重子

麦の秋刈らねば倒す隠れん坊	田中章嘉	手庇のバイクの少女麦の秋	檜鼻ことは
麦秋や水筒揺らしランドセル	田中弘子	入り江には漁業の暮らし麦の秋	平野 楽
麦秋やかつて豊かな米どころ	寺内洋子	銃声はきつと空耳麦の秋	福田千春
麦秋や黄金に染むる一本道	寺町知子	麦秋や段々畑に獣道	保坂翔太
かくれんぼ初恋生る麦の秋	飛 永 鼓	健気なり一畝だけの麦の秋	曲淵徹雄
亀の槽雨で増えけり麦の秋	南條きわゑ	御持たせに卓にぎはひて麦の秋	正木 萬蝶
麦の秋穂を噛みガムや下校の子	西幅 公子	人懐こい犬の散歩や麦の秋	松村笑風
キャンプ場賑はふテント麦の秋	野口 和子	産土にきやうだい揃ふ麦の秋	丸屋 詠子
麦秋の海風集む薩摩富士	畠中風花	麦の秋車窓遙かに屋敷林	三浦真由美
琴電の車窓に映ゆる麦の秋	畑宮 栄子	麦秋や老後へ貯むる初給与	皆川 更穂
ひな三羽に吐きもどし餌や麦の秋	原田 自然	収穫後の芳しき香や麦の秋	宮崎チアキ
麦の秋筑波の街のパンまつり	原田 秀子	麦秋や球児円陣声太し	室井早都子
麦の秋葉裏のたまご犇めいて	樋口 元美	麦の秋Mrs. の楽曲響く朝	元田 亮一

麦秋のシャッターチャンス無人駅

のんびりと紙漉き村へ麦の秋

そぞろ神乗せて軽トラ麦の秋

ボタン乗り降り八高線の麦の秋

麦秋は里のぬくもり永久にあり

足早に下る箱根路麦の秋

麦秋や主は友と旅行中

にはとりの声のびやかに麦の秋

麦秋のうねりの中の道の駅

ひた走る農免道路麦の秋

麦の秋一粒二倍もありがたし

道草は麦秋の道コッペ食む

本橋 稀香

森 和子

森下 山菜

森下 美智枝

山岸 久美子

山下 ユリ子

山戸 美子

湯浅 和

横山 君夫

横山 礼子

吉川 拓真

綿引 まりこ

訃報

水明誌友作家 香田裕誌 様

お病氣にて去る六月二十一日にご逝去されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

誤植訂正

二〇二六年七月号三三頁 慎んでお詫び致します。

正 百年の土間こそ我が家残る虫

誤 百年の土間こそ我が家の残る虫



山紫集作品評

網野月を

麦秋やヘリコプターのよく飛ぶ日

石田 慶子

時候の季語「麦秋」は、麦が黄熟して実り豊かなイメージと刈り入れを待つばかりの人々の期待感などがぎつしりと詰め込まれた季語である。時候のジャンルに分類されながら、麦畑そのものや麦の形態、麦畑を渡ってくる風の色合いと句いまでも表現している季語である。確かに各歳時記に収録されている例句を見れば、そのような意味合いで使用して成功をおさめている秀句が並んでいる。掲句もその意味合いでは、時間的な意味合いでの季語の斡旋というよりは、景を決めようとする意味合いでの季語であると思われる。それでこそ中七座五の「ヘリコプターのよく飛ぶ日」が生き生きとしてくるといふものだ。

麦の秋シャンソン唄ふバガボンド

渋谷きいち

取合せの妙を感じさせる句である。上五の季語「麦の秋」は時候の季語であるのだが、文字通り農事とは深い関係性を有している。農事、つまり定住生活者の生活を象徴的に表現

した季語なのである。決して遊牧民族には無い感覚なのである。対して中七座五の「シャンソン唄ふバガボンド」は、さすらい人そのものであり、シャンソンを歌うことで生活の糧を得ている、世が世ならば吟遊詩人めいたものである。日本的に言うならば公界の民というところであろう。その相反する事柄同士の取合せということなのである。ではあるが、決して反目し合っているとか、敵対関係を演出していない。むしろ補完関係にあるようにさえ思えるのである。その取合せた者同士の微妙な親密性がこの句の成功を導き出している。

麦秋や研ぎの看板道しるべ

野村 美子

中七と座五の間には意味的な繋がりがある。研ぎの看板が道しるべ代わりである、ということである。その句意を上五の季語「麦秋」で包み込んでいる訳である。今でこそ農作業のほとんどは機械によるものとなったが、嘗てはむろん手作業であった。鎌なども研いだものである。ひと昔までの農家は、その道具の手入れは自前で行っていただろう。けれども研ぎ屋とは距離感があるが関係性が無い訳ではない。「麦秋」という季語の懐の深さを感じさせる句である。

手の温み残して帰る麦の秋

持永 喜夫

中七の「…残して」の主語は作者である。故意に「手の温み」を残したのである。その相手と作者の関係性は読者が想像するしかない。友人同士か、親子か、兄弟か、はたまた夫婦かである。恋人同士であるかもしれない。相手が確かにそ

の「温み」を感じ取っていてくれて、物語は続くのである。

彼の人の足跡迎る麦の秋 日高道を

「彼の人」はいったい何方であろうか。俳句にまとめるということは、真つ先に俳人を思い浮かべるのであるが、何方かは作者のみ知る秘事である。ということは読者は、それぞれがその何方かを意中の人に定めて鑑賞すればよいのである。筆者などは、仕事場での飲み友達を想定して鑑賞した。

麦の秋トランペットの空に向く 梅澤輝翠

中七の「トランペット」は楽器そのものを思い描いても良いであろうし、「トランペット」に見立てた別のものを考えても良いであろう。前者ならば、なかなか若者の所業のようであるし、後者ならば上を向いて咲く花卉を想像しても良いだろう。

長すぎる釣竿たたむ麦の秋 遠藤人美

上五の「長すぎる」の空間的な設定は、季語「麦の秋」に引き寄せて鑑賞することも出来るし、また時候の季語であるので空間的には特定の場所を想定することも不要かもしれない。ところで、時間的な設定は、読者に任されているようである。季語の意味合いからの大枠の設定はあるものの、幾分長い時間のスパンを考えて鑑賞すべきか、ピンポイントの時間を想定して鑑賞すべきなのは、読者の経験に照らし合わせて読むという事であろう。

嬰兒抱く胸乳豊かに麦の秋 山中いちい

座五に置いた季語の本質を遺憾なく表出している句である。個人的な幸せを表現しているだけでなく、一族や大きくとらえると民族の幸福感を表現しているようにも鑑賞することが出来るだろう。

麦の秋黒ん穂でひげガキ大将 河野はるみ

麦畑には、麦穂が波打っているのだが、その無数のようにも見える穂の中に「黒ん穂」と通称される真つ黒となった穂があることがある。黒穂菌の感染によるということであって、広がることを防ぐためにまめに見回って、摘み取るのである。その摘み取った「黒ん棒」を鼻の下に当てて髭に見立てている、何とも無邪気な「ガキ大将」であることか。ひと昔の景かも知れない。

穀倉に積まるる武器や麦の秋 青木鶴城

本来ならば豊かな秋の収穫を積み上げるための「穀倉」に、何と「武器」を積み上げているというのである。「穀倉」の本質が全く逆のベクトルに向いているのである。皮肉というよりも人間の仕事を嘆いているということである。反戦の句を意図していると鑑賞した。歴史に学ぶべき事々が為政者によって無視されているということである。座五の季語「麦の秋」が泣いている。

日高道を 選

鼓 笛 集

卯波立つ五浦六角堂の黙

石井直子

残したい日本の音風景100選にも選ばれた五浦海岸の卯波の音と、近代日本画の聖地である岡倉天心所縁の六角堂の黙の対比が素晴らしい。作者はこの静かな六角堂の中で心豊かな時を過ごしたのである。

蜘蛛の囀の妖しき罌に魅せられて

綿引まりこ

雨上がりの蜘蛛の囀は水滴を纏ってまるで芸術作品のように美しく、まさに妖しい罌のようである。

作者は庭隅の樹々の間に作られた蜘蛛の囀に魅了され、ま

るで自身が蝶や虫のように罌にはまるような錯覚を感じたのかも知れない。

砂の浮く「とまれ」の文字の先に夏

石関六弦

海岸までの一本道を進むと道路のアスファルトの「とまれ」の文字、海から風で飛ばされた砂に少し覆われている。その先を見ると目的の大海原が見える。

中七から座五にかけての「文字の先に夏」と言い切った措辞が効果的で時間的にも空間的にも一気に夏を感じさせる。

夏来たる飛行機雲の一直線

山中いちい

「飛行機雲の一直線」の措辞が全てを語っている。

梅雨の晴れ間の真っ青な空に真っ白な飛行機雲が一直線に伸びて行き、夏到来を実感している作者が見える。

色々と脚色せずに素直にシンプルに詠んで成功している。

風薫る百葉箱のある校庭

元田亮一

今はなかなか見ることの少なくなった百葉箱。筆者の子供のころは学校には必ずあったものだ。この句の作者も、偶然通りかかった学校の校庭に百葉箱を発見し、子供のころのことを思い出しているのだろうか。「風薫る」の季語との取り合わせが良い。

—— 以上特選

以降は各句をひと口鑑賞します

春風や峰と戯るる学徒ども

秋谷風舎

ママです。この峰は実景であるとともに、ここにいる生徒たちの目指すべき高みを暗示しているのであろう。

挽ぎたての筍背負いて藪の外

阿部幸代

筍なので「挽ぎたて」より「取れ立て」でしょうか？

「藪の外」が漠然としているので「家路かな」ぐらいは？

道真も見上げたかもね風待月

新井のり子

「風待月」は「水無月」と同じく六月の異称。

「水無月や天神様の月を見て」ぐらいでは如何？

やっと出た今年こそはと海芋の芽

飯田忠男

作者のお気持ちはよくわかりますが、ちよつと控えめで「切なくていとほしきかな海芋の芽」などご参考に。

女子会のやおら肌脱たる二人

遠藤人美

季語の選択に脱帽。「おもむろに肌脱したる女子二人」だと普通過ぎますね。原句の勢いに負けます。

ばら祭り個性の強き奴ばかり

川島夕峰

「奴」が良いですね。「奴」と言いながら、どこかに作者が感じてゐる親しさが伝わります。「ばら」は「薔薇」で。

風薫る両家揃ひて庶民かな

木谷葉子

ママ。作者は「庶民かな」を使いたいのでしょうか？「釣り合ひの取れし両家や風薫る」では？

サーファーよさあ漕ぎ出せアメリカへ

北山建治郎

作者の気持ちを考えると下手に直せません。ママで。

夏雲の覆ふ波止場や舁行く

倉田星歩

客観写生句の良句だと思います。このママです。

インドア派の夫を連れ出し蕨採

嶋田洋子

ママです。ご夫婦の愛情を感じます。共白髪までお元気で。

若葉風子をあやしつつ倅笑み

杉浦千祐

少し散文的になっていますので「子をあやす倅の笑みに若葉風」ぐらいでどうでしょうか？

眼を透かし黒猫のそり麦の秋

鈴木藻好

眼を透かすのが作者なのか黒猫なのか、猫派ではない筆者には難解でした。季語を変えてみても良いかも知れません。

「お義母さん」と母の曰メール嬉しけれ

関谷多美子

「嬉しけれ」を敢えて言わずに余韻を残すことも出来ます。

「母の日のメールに」お義母さんの文字」

青梅や赤子の臀のごとき張り

反町 修

ママです。客観写生の良句です。

新緑の狭間の光人に糧

武田重子

ママです。新緑、光、そして「人に糧」まさに聖書の世界。自然の中で人は生かされ、糧を与えられることに感謝。

「シヨージ君」逝くや書棚に缶ビール

田中弘子

取り合わせの上手な句です。筆者も東海林さだおのファンでした。「逝くや」で切らずに「逝きて」ぐらいでは？

流木にからむ泡粒卯波寄す

寺町知子

「泡粒」がちよっと漠然としてしまいました。

「卯波かな」や「卯波立つ」でもよかったかもしれません。

青嵐 知覧の若き特攻隊

畠中風花

「知覧の」を「知覧に」と助詞を変えることでその瞬間の驚いた気持ちが出ます。また「若き特攻隊」を「特攻兵」にしてはどうでしょう？

ネモフィラの歓声スマホ立ち上がる

樋口元美

「ネモフィラ」はまだ季語として定着してない悩ましい題です。でもひたち海浜公園で現物を見たら絶対に季語になるべき花ですよ。外に出すときには「春の丘」などと組み合わせるのも一つの手です。

木洩れ日にきらり玉ぼけ緑かな

平野 楽

ママです。但し「玉ぼけ」は写真をやる人じゃないと分からないかもしれませんね。

若葉風釘を啞へる若大工

松村松風

ママです。「若」のリフレインを狙いましたね。「若大工」以外でも「若大将」や「若旦那」なんかも。

鎮守社にしばしとどめむ薫る風

丸屋詠子

「とどめむ」と「薫る」と動詞が繋がっていて調べが整いません。「薫る風」を「初夏の風」にしてはどうでしょう。

駅前の駐在所留守燕の子 三浦真由美

何とか五・七・五に納めようとした努力の跡が見られます。
「駅前交番子燕留守番中」

いつの間に育ってしまひ子供の日 皆川更穂

「いつの間に」は正しくは「いつの間に」かですので、「知らぬ間に」で五音を維持しましょう。

蒼蒼と潤ふ大利根鯉のぼり 室井早都子

「鯉のぼり」が季語で主役のはずですが、作者は利根川の雄大さを表現したいという矛盾があります。あえて固有名詞を出さず（また中八でもあるので）「大利根」を「大河」に替えてみては如何でしょうか？少し「鯉のぼり」が主役になりそうです。

手のひらの砂つぶつぶに風薫る 持永喜夫

「砂つぶつぶに」を「砂つぶつぶや」と助詞を変えて、切れを入れては如何でしょうか？

ひとしきり轉りて首傾げをり 本橋稀香

ママです。小鳥を見ていると、時々首を傾げていますね。細かい観察眼が匂づくりに生きています。

舟を漕ぐ神田祭の書肆店主 森下山菜

ママです。上手な句です。祭りそのものから視点を移した着眼点の良さが光ります。

花言葉問はれ戸惑ふ水中花 門真宏治

ママです。「花言葉」を持ってこられた発想が上手です。戸惑っているのは「水中花」？それともそれを見ている作者でしょうか？

奥飛驒路天牛の声ひびきけり 山下ユリ子

ママです。「天牛」の季語を良く持ってこられました。奥飛驒の温泉宿で寝静まったころの情景でしょうか？

吾の名持つダリア購ふ日曜日 横山礼子

ママです。「日曜日」に特別な意味があるのでしょうか？

アリウムや恥づかしく口回すしか 吉川拓真

「アリウム」まだ歳時記に載っていない、ただ夏の季語に準じて使われ始めている季語、それに挑戦する作者に先ず敬意。「口回すしか」が正直良くわからない。アリウムがニンニクに通じるから、臭いが恥づかしくて口回す？なんてそんな単純ではないはず。参りました。

因みにアリウムの花言葉は「夫婦円満」とか。

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

山容の青まざりゆく五月富士
渦巻くは志功の雲ぞ五月富士
老舗へと四葩を辿る小網町
雄渾な匠の筆致五月富士
銭湯の屋根越しはるか五月富士
赤富士を崇め浅間一の宮
はまなすや待つ人のいる網走へ
民宿の窓にどんと五月富士
弱りたる網膜梅雨の入りを見る
盤石な守備網崩す大夕立
山肌に夕日沈めて五月富士
熱海のはずれ網代の山の避暑の家
一穢無き空に高高五月富士
網棚にリュックがざらり夏休み

由紀子
千祐
順子
徹平
延昭
京子
以上特選
節代
由紀子
亮一
喜恵
延昭
マスマ
千祐

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

車座で冷やし素麺網代笊
漁前の網子の仕事明易し
終点のバスの網棚カーネーション
緑風や狙ひをつけて投網打つ
弥陀仏の天網確と梅雨の雷
首都高を裾に従へ五月富士
ゆつくりと歩く老犬若葉風
祖母の手のゆるく巻きたる棕かな
ダイケアのバスは静かに若葉風
凝視する猫のひげ先若葉風
餅米の粽は母の母のもの
トラツクに丸太ぎつしり若葉風
服が地味といひ張る妻や若葉風
いつも会ふ稚と手を振り若葉風
若葉風湖畔の画家が筆舐める

はるみ
順子
徹平
和子
卓郎
京子
亜弥子
いちい
妙子
慶子
峰雄
みどり
鶴城

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 昇 報

矜持もて生きよと母の棕かな
腕の皺気にする夫に夏來たる
棕解く母の手元を三兄弟
さはやかに川面渡るや若葉風
くるくるくると解けば棕の白き肌
運転手は風を入れたし道若葉
ナフサ由来の袋ぶら下げ若葉風
醍醐寺の何処歩いてても若葉風
切りたての前髪気にし若葉風
ふるさとの山のかをりや笹粽
若葉風キヤリーバッグがせめぎ合ふ
いつもの小道夏草茂り踏み迷ふ
生ひ茂る夏草分けて雲立てり
夏草に胸までおはれ磨崖仏
鶴城
以上特選
敏江
慶子
恵美子
千春
妙子
峰雄
亜弥子
いちい
みどり
鶴城
順子
星歩



薫き込めし香の残り香明易し
首塚に伸び放題の夏の草
夏草や津津浦浦に一の宮
旅情またきりと旨き洗鯉

順子
康世
萬蝶

克巳
由紀子
光子

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子 報

夏草をかみなり族があふりゆく
鳶の輪のいよ大きく梅雨晴間
五月闇遠く動くは列車の灯
夏草や配流の里の館跡
真夜に聴くロッキンロール夏の草
夏草を刈りて清らに地鎮祭
どくだみや庚申塚の遺る角
風一陣夏草匂ふ古戦場

以上特選
千祐
雅夫
星歩
康世
萬蝶
順子
昇雄

第五例会（浦和）

河野はるみ
岡田宣子 報

父の日や酌み交はす酒酌み交はす
ゆつくりと星顯るる夏至の宵
夏至ゆうべアフリカ小さき世界地図
父の日は連れだちバーで角ダブル
庚申塚の關伽水つづく夏至鴉
父の日なぞ知らず家長でありし父
父の日や百科辞典を枕にす
父の日や父似と言はれ八十路生く
父の日や父に手向けの生一本
父の日の父は饒舌まづ一献

克巳
由紀子
光子
行雄
翔太
マスミ
恵子
章子
昇
喜恵

夏風流線形の雲飛ばし
青風墓に供ふるリポビタン
青風案内されゆく長廊下
人形を操る所作や風薫る
青風葉裏見せ合ふ庭の木木
神磯の鳥居を囁す青風
噴水の女形の形に崩れけり

恐竜咆哮そは空耳か青風
少年の抗ふ双眸青風
雨戸開け頬に一撃青あらし
青風乱鴉の群れを鎮めゆく
青風とり残されし三輪車
夜の部に連獅子街に青風
船遊灯の揺るる屋形船
色恋は形而上学五月闇
生き抜きて今青風すがすがし
不動尊の形相猛し芒種かな
青風しばし足とめ風見鶏
田の水を吹きこぼしてや青風
夏稽古見栄切る芸の形の良さ
パドックの牝馬の気負ひ青風

以上特選
マスミ
佐江
はるみ
星歩
千春
ひろこ
詠子
萬蝶

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

夏至の海入日を塗す真帆片帆
父の顔して父の日を遣り過ごす
夏至といふ言はば地球のけちめの日
読み返す沙翁の戯曲夏至の夜
父の日や久に父の名書いてみる
履きぐせの残る庭下駄父の日来
夏至の昼予定なき日の浮遊感
池の面の亀と目の合ふ夏至の昼
夏至の日や遊ぶ子を呼ぶ母の声
二次会を溢れて帰路や夏至の夜

昇
行雄
章子
由紀子
喜恵
以上特選
延昭
暦文

夏めくや黄昏時の立ち話
夏めくや櫂の葉陰広くなり
朝掘の簡便を待つ夕べ
小糠添へ筍捌く道の駅
夏めくやエプロンの裾端折りをり
足先に五感集中筍掘る
朝靄にばかり浮島夏の草
好き嫌ひなき食卓に筍飯
夏めくや袖まくり行くビジネス街
ほくそ笑む筍飯の味加減
地方紙に包む筍届けけり
筍や二節のびて年長さん

章子
知子
宣子
はるみ
以上特選
千祐
義子
知子
章子
宣子
はるみ

青風と残されし三輪車
夜の部に連獅子街に青風
船遊灯の揺るる屋形船
色恋は形而上学五月闇
生き抜きて今青風すがすがし
不動尊の形相猛し芒種かな
青風しばし足とめ風見鶏
田の水を吹きこぼしてや青風
夏稽古見栄切る芸の形の良さ
パドックの牝馬の気負ひ青風

萬蝶
邦人
稀香
慶子
詠子
千祐
鶴城
京子
ひろこ
千春
星歩
はるみ
佐江
マスミ
以上特選

関西例会（大阪）

森本早苗報

短夜や築百年の軋る音

洋子

神輿昇く顔ぶれ揃ふ夏木立

和子

梅雨寒や待合室の椅子足らず

ノルン

喪の家とは思へぬ賑はひ螢飛ぶ

千枝子

堪へ切れず雨粒落とす額の花

人美

フラスナーは前に付けたし夏衣

満耶子

ゴンドラの駅舎を包む青き鳶

早苗

日雷高室院の句座止まる

〃

——以上特選

藩侯の騎馬像駆ける夏木立

和子

梅雨晴間これ天よりのおもてなし

洋子

夏木立奥へ奥へと空なくす

千枝子

少女らの太鼓ばやしや和歌祭

きわゑ

白靴のリボンを替へるライブの日

人美

濡れてなほ艶めく花や七変化

嶋田洋子

晴天の女神の如き夏木立

ノルン

今日の色は明日も大好き七変化

満耶子

車窓より白波岩と夏木立

千世子

夜の闇をつんざき渡る時鳥

早苗

昔話あれこれ 59

丸山マスマ

敦康親王と隆家公

隆家公は、一条天皇の第一皇子の敦康親王がそのうち皇太子に立たれるだろうと期待していた。親王の母は故中宮定子で、隆家公の姉である。

一条天皇が発病され、隆家公がお見舞いに参内した時、「あのこと（敦康親王を皇太子に立てること）はどうとう出来ずじまいになってしまったよ」と仰せになられたのを聞いて、「人でなしめ」と申し上げたかったと他人に言い、邸宅に戻って階に座り、無念そうに手を打ったとのことである。

この頃、一条天皇の許には道長の長女彰子が入内しており、敦成、敦良の二皇子が生まれていた。

病床にあった一条天皇は熟慮の末、道長公を後ろ盾とする敦成親王を東宮に指名するしかなかったのであろう。

隆家公大宰大式を望む

その頃、隆家公は目を患い、宮廷社交界との付き合いも絶え勝ちであったが、大宰の大式に欠員が出た、また当地には宋の国の眼病の名医がいると聞き、大式就任を希望した。

大宰大式は多くの人が就任を希望するポストであったが、三条天皇は御同病で同情されたのか、直ぐに了承された。

刀伊国九州を襲う

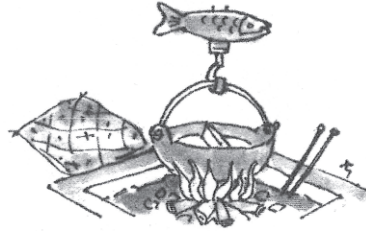
隆家公は、人柄のせい、九州の人々に大層慕われた。隆家公の赴任中の寛仁三年（1019）刀伊の国の来寇があった。

隆家公は、実戦の経験はなかったが、愛国心の強い人であったので、在地の人々を指揮して一致団結し見事に平定した。

この来寇で犠牲者、捕虜として連れ去られた者も多数いたが、新羅の国の助けで捕虜を取り戻した。隆家公の事後処理も見事であった。

道長公は、隆家公を有能な人物として高く評価し、世間からも大きな信望を得たのであった。

各地句会



若狭水明俳句会 (若狭)

アルバムは逝き人ばかり花曇
一斉に陽を刺すように松の芯
王を舞ふ若き男の子や若緑
送り出す娘への心中花曇

笑 風
鼓 湖
夕 月

紙のごと干されし魚や花曇
桜子と名付けし孫や初桜
建前のレッカー高し松の芯
直会の御神酒を少し緑立つ
初緑まだ名の付かぬ新生児
花曇月に一度の診察日
花曇り覚えはじめの九九暗誦
花好きの就農ガール緑立つ
不足する原油の放出花曇
若緑僧の歩みの音軽し

あゆみの会 (浦和)

釣堀に立ち寄り遊ぶ営業マン
今生の敵とばかり蠅を撃つ
釣堀の水面に泳ぐ白き雲
釣り堀や水面の風に時忘れ
猫の目の蠅の動きに右左
釣堀が日課となりぬ定年後
きざきサークル (浦和)

老鷺に目覚めの早き坊泊り
老鷺や屋敷稲荷のある旧家
老鷺を遠音に聞きつ露天風呂
退院の決まりし朝の五月富士
農鳥の宙へ羽ばたく五月富士
五月富士水草青き柿田川
老鷺や西行庵も遠からず

初花 寛久 保人 郁人 和風 祥子 ことは 自然 友夏

重子 啓子 俱子 靖子 藻好

昇 俱子 啓子 由美子 満智子 和子

蝌蚪の会 (浦和)

南風吹く木陰はしばしカフェどころ
四葩咲くホスピス友のやさしき眼
出目金と玻璃ごしにふと眼の会ひぬ
俺に貸せ金魚すくひの紙の網
ひらひらの金魚猫は大あくび
その瞳覗いてみたしサン格拉斯
四十雀言葉みつむる耳と目と
きんぎょキンギョどちらが太郎次郎かな
鈍色の沖波うねる大南風

野菊の会 (与野)

絵心のあらまほしきや春の雪
母恋ふる色茄子の花雨上る
夏柳川辺に酒蔵立ち並ぶ
点描でえがく自画像麦風
琴の音に歩調を合す菖蒲園

皐月の会 (浦和)

艷歌消せ霞切夫婦もう啼くな
歌舞伎座の団菊祭や青時雨
大重機移動する音明易し
簾椅子の軋みに昭和遠くなり
簾椅子の父に呼ばれて煙草盆
文豪の簾椅子に些と座してみる

風舎 ひさの 秀子 元朗 礼子 幸子 月子 宣子

美代子 和子 清子 恵子 光子

山菜 光代 珪子 曆文 更穂

櫻 蔭 句 会 (浦和)

一族を統ぶる威厳や女王蟻
井の中に映る姿に夏の風
緑さす長瀬駅の格天井
蟻の背に自由研究マーキング
水無月の井戸を潤す今朝の雨
薫風や天井画龍二匹舞ふ
緑濃し天井高くミサ響き
青風竜が目を斜く天井画
風炉点前末広がりの井戸茶碗
蟻一匹夕べ煉瓦の目地走る
釣瓶井戸旨しあの水恋ふる夏
炎日や油井に上る地の憤怒

離 の 会 (浦和)

山小屋のひしく丸寝明易し
夜の秋無常を綴る徒然草
ゆつたりと夜風にゆだね洗ひ髪
片蔭を無音で過る蟹歩き
短夜や夢に入り来る深夜便
推敲や窓は白白明易し
丹の橋を渡る白無垢風薫る
コクーンシテイルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
哨戒の鳶が輪を描く大青田

久美子
千恵
真理
行雄
茂子
美智枝
玲子
由紀子
美子
多美子
公子
幸代

公子
喜恵
輝翠
はるみ
桂子
チアキ
佐江
昇

また空の狭くなる街青風
秘境とは斜めの暮らし青棚田
学舎を陸の孤島に青田波
呉須に載り笹の装ふ洗鯉
ミモザの会 (横浜)

「神田川」ともに聴くひと亡き緑夜
凡鐘の重く沈みぬ梅雨ぐもり
梅雨最中ややりたい事を箇条書
青梅雨や寺の朱印に梵字あり
園児らの並ぶ長くつ梅雨に入る
終活やのどをうるほす心太
古傷が疼きて知るや梅の雨
野良猫のもぐる草むら梅雨の雷
顛顛の疼く目ざめや迎へ梅雨

りんどう俳句会 (浦和)

巡り来てまた銅賞の薔薇の前
産声を待つ短夜の長さかな
薔薇園や老のほどき薄化粧
紫陽花や彼待つ駅へあと五分
小雨ふる鎌倉五山半夏生
天と地を分かつ五合目夏の富士
短夜や目覚めてはまた時を問ふ
紹羽織やカイゼル髭に五つ紋
梅雨晴れの路地に五十集の啖呵かな

早都子
洋子
俱子
由美子
萬蝶
史代
慶子
玲子
美千子
栄子
詠子
亜弥子
千春

君夫
順子
翔太
夕峰
徹雄
まりこ
寿夫
風子
卓郎

りそな俳句会 (浦和)

奥の院雨意はこび来る五月闇
醉漢が鍵穴探る五月闇
父の日の照れた笑顔に酒満つる
五月闇閉ぢ込められし蔵の黙
五月闇孤独死と記す検案書
父の日の手料理づくし酒二合
野ばらの会 (浦和)
影つれて二寧坂ゆく白日傘
水無月の母逝きし日の白き耳
色褪せし母のパラソル手放せず
空魚籠を時折覗く白日傘
水無月や夕日水田に滑り込む

俳句の手ほどき (岩槻)

婿を取る総領むすめ桐の花
花桐の雨むらさきの静寂かな
モンローの足形に触る羅府の初夏
里山の別れ道なる桐の花
若葉風知らぬ同士の足湯かな
琴の音の聞ゆる門辺桐の花
雨上がる里の民家の桐の花
花桐の視線は吾の足にまで
桐の花紫だちて空へ空へ

マスマ
久美子
道
建治郎
雅夫
栄子
茂子
秀子
夏江
みき子

延昭
佐江
徹平
忠男
翔太
桂子
美子
久美子
幸代

水不足なり湖底の道を行く日傘
女工越えし峠の謂れ桐の花
花桐の連なる里や京丹後
赤あんどう足して餡蜜定まれり
露に降る雨足つよく夫の病む

鶴川山百合句会 (鶴川)

粒よりの青梅は若き貴公子
毎日が休日昼咲月見草満開
夏めきてじつと見ている日本地図
青梅のころがつてゐる菓子舗跡
ふつくらと実梅うるはし空うるはし
青梅や疵あるものをいとほしみ
鯉買ふ今日は安売り水曜日
青梅のヘタ取る仕事手間仕事
手間仕事祖母の手実梅コロンコロン
姉より届く能書付きの諸焼酎

珊瑚の会 (浦和)

川泳ぎさるくちなはを見送れり
桐の花梢に懸かる昼の月
一筋の光となりて蛇泳ぐ
平家谷の伝へを今に桐の花
青く塗る足と手の爪梁に蛇
蛇穴を出でて地上をのた打てり
蛇住むといふ古民家の高天井

知子 卓郎 チアキ 更穂 かつ子 史代 広子
玲子 まどか うさぎ 美千子 理恵 萬蝶 千春 由美子 史代 広子

風格は家の主たる青大将
バス停の椅子に長長青大将
遊び船冥土の川を渡らむか
夏空へコンサート今熱唱す
後れ毛の少女まぶしき船遊び
船頭の歌のうまさよ船遊
谷川のせせらぎ響く水芭蕉
船遊バリの灯滲むセーヌ川
唱歌和す酒場の窓に夏の月
合はせ漕ぐ息の荒さや船遊び
夏の朝唱ふる経の声高く
遊び舟老い一人ゐて紫煙かな
牛蛙老僧経を唱ふ如
船遊世過ぎの垢を流しけり

蘭の会 (浦和)

若枝句会 (浦和)

老いの手の揉み出す新茶針となる
置き配のロゴ横たはる薄暑かな
新たな命迎へて薄暑かな
夏めくや憂さなく母は高軒
機 会 (浦和)
キャベツたつぶりのコロッケパンよ学食よ
武者人形園児の声が雲にのる

和子 節代 和子 さよ子 伸子 小麦 しよこ まりこ 風子 夕峰 寿夫 月を 京子 風舎 泰生 貞代 美佐子 みどり 富子 文子

兄弟で役目分ちてて武具飾る
収穫のキャベツ畑に滴飛ぶ
世の混迷生きたる決意や武具飾る
真つ二つに切れば甘藍息を吐く

若楠句会 (浦和)

明易やけん玉にある小宇宙
跡継がずペロリ三種の柏餅
良いとこで夢の打ち止め明易し
配達のバイクのうねり明け易し
大泣きす子の左手の柏餅
手加減の兄弟げんか柏餅
岐路立ちて決むるは人ぞ著我の花
東雲の瑠璃色となり明易し
明け易し見えぬ時間が時きざむ
明易や眠らぬラジオ深夜便
明易や猫の重さの柔かし
姦しき女三代柏餅

小梅の会 (浦和)

薫風やページをめくるテラス席
裸児や風呂から居間へ玄闔へ
母の日の不意の花束白き雲
主なき紫陽花盛る柚の家
五月晴れ召されし友は妻のもと
若葉風森の奥より生まれけり

あつ子 朋子 裕誌 千重子 弘子 宏治 操 久美子 葉子 風舎 京子 慶子 鶴城 直子 真由美 隆文 恵子 啓子 隆然 道

越後の会 (浦和)

薫風や越後路ゆるく一両車
別れ際若葉の風に乗る「またね」
新生活の始まりし街若葉風
女学生の膝小僧跳ね更衣
生涯を幾度引越す半夏生

新樹の会 (浦和)

正真の専守防衛烏賊の墨
着流しの殺陣師の仕切る夏芝居
友来たり腕を振るいて烏賊の墨
西陣の検印光る夏衣
薔薇の門婆の陣取る立ち話

初陣の女性市長の若さ夏

たかなな俳句会 (川口)

鳥の日や背筋伸ばして歩く人
夕立が来る気配して見る車窓
形かへ雲流れ行く愛鳥日
蚕豆は赤児の足裏愛らしき
愛鳥週間目覚め清しき旅の宿
山頂の視界パノラマ愛鳥日

めだか句会 (浦和)

夏めくや大樹の落とす影ふとり

尚己 鶴城 義子 小麦 のり子 みち たみい 鶴城 徹雄 道吉 清吉 風子 修 宣子 知子 翔太 真理 輝翠

初鯉縁起担いでまあ一杯
カプリパンツ闊歩し街は夏めけり
初鯉今が喰ひ時駅前店
一目惚れふと思ひ出す夏夕べ
デジタルに触れぬ日と決め初鯉
とこしへに老害知らず初鯉
遣らずの雨あくれば眩し夏めきて
二割引シール待ちある初鯉
シンプルに生醬油で食ふ初鯉
板の間をぺたぺた歩き夏さざす
初鯉一本釣の竿跳る
青葉の会 (浦和)
清涼を呼ぶ白皿の夏蜜柑
ペランダに夏蜜柑落ち大音響
左利きの少女の肩に夏の風
初がつを器用にさばく左利き
八高線の窓に鈴なり夏蜜柑
五月雨昼寝の稚は左向き
山頂で重さ忘るる夏蜜柑
夏みかんクレーターとはこんなもの
持て余すお礼返しの夏蜜柑
夏蜜柑ジャムに変身大もてに
半夏生十八歳の左襖

道代 和子 莊志 眞美子 六弦 楽 章嘉 恵美子 月を はるみ 知子 久美子 美紗子 真理 桂子 美智枝 美子 公子 啓子 和子 洋子 輝翠

芽吹句会 (浦和)
葉桜や木洩れ日の描く抽象画
車椅子押す手も軽く立夏かな
薫風や違法自転車青切符
葉桜となりし墨堤乳母車
何と言っても健康第一菖蒲の湯
グループで来る葉桜の水飲み場
菖蒲湯のねがひは子らに父の愛
葉桜のラジオ体操新顔も
夏句会娘押し来る車椅子
葉桜や上野の森に鐘ひとつ
芙蓉句会 (浦和)
樹も草も生氣はらみて麦の秋
麦秋や麦の穂光る奥武蔵
瀬戸内を臨む畑や麦の秋
なごみの会 (浦和)
山路行く百の燭あり花茨
橋下の秘密の基地や花茨
家庭訪問新茶を入れる少女かな
青風古き表札さらはるる

節代 茂子 かつ子 喜恵 美子 税子 弘子 久美子 ひろこ 千重子 玲子 富子 おにこ 修 道を チアキ

柿の木塾（浦和）

子育てのハウツーものやほととぎす

絶叫のバンジージャンプ杜鵑

夏霞静かに暮るる山上湖

ほととぎす秩父山系との曇り

早蒔の苗すくすくと夏霞

上り来てあと何段か遠郭公

沈む夕日に啼く郭公の影絵

円卓の会（浦和）

弥山遥か広島湾の清和かな

茄子の花喪に服するは残る者

清和源氏の絶えし鎌倉和清の天

園児らのこねこね細工鯉のぼり

恋と愛を比べるほどの青春よ

十代の恋に徒なし茄子の花

葉の陰のゆかしき色や茄子の花

ほんたうのむらさきはこれはなすび道

茄子の花何だつたのだらう吾が大志

和歌山水明俳句会（和歌山）

上人窟への崖道絶えて青葉潮

へりコブター霊峰の新樹ゆるがせり

子供の日青き自転車さつさうと

小さき巣を取り合ふインコ緑の日

酔ふほどに箸の進めり初鯉

新茶の香尖る会話を包み込む

南吹く和歌三神の愛でし渴

水明澤つくし句会（大阪）

海原を的に陽光夏はじめ

何時の間にか閉店苦味増す古茶

バードウィーク鳥に負けじと女の声

万緑や胡座の子脛をもて余し

水明熊谷句会（熊谷）

ところてん八年ぶりのクラス会

水馬のフレンチ・カンカン水の上

心太新米医師の「老化です」

骨相は馬の面してあめんぼう

水道の術は使へぬ水馬

どの田にも絶えざる水輪あめんぼう

水すまし跳ねて水輪にあるリズム

心太突き出されたる新世界

吾にできぬ臨機応変心太

裏芸の冴ゆる短夜や銘酒酌む

若鮎句会（浦和）

道絶えて鶴棲む森を赤頭巾

見舞ふ日の空あをすぎて麦の秋

満耶子

きわゑ

洋子

廸代

智恵子

人美

ノルン

洋子

茂子

風子

徹平

秀子

忠男

君夫

栄子

道を

翔太

卓郎

山菜

ひとみ

通り過ぐる電車一両青田波

鶴一羽叶はぬ恋に身をやつし

ウッドデッキペンキ塗りたて麦の秋

麦の秋亀の首筋ながながと

草踏み何にいそしむ鶴の昼

うねりくるゴッホの孤独麦の秋

夏めくや彼誰時の通り雨

麦の秋グラスの霜と柿の種

秀子

貴香

輝翠

真

芳春

月を

喜夫

水明競詠

(令和八年)

恒例の季音・水明全員が対象の水明競詠です。ふるってご投句下さい。
掲載は十二月号になります。

兼 題 「秋 晴」 「秋の晴」 「秋晴る」の傍題に限る

「法師蟬」 「寒蟬」 「つくつくし」 「つくつくぼうし」の傍題に限る

「手」 (詠み込み) ※秋の季語で詠む

句 数 三題通じて五句
締 切 九月十五日(締め切り日を厳守ください)
投句用紙 九月号巻末に添付

第 10 回「水明塾」の講師決定 !!

10 月 31 日（土曜日）に催されます第 10 回「水明塾」は、午前中に講演会を企画しました。

今回は高柳克弘講師を招いて「芭蕉に学ぶ俳句の心」と題してご講演頂きます。奮ってご参加ください。

申込み等の詳細については、改めてご案内いたします。

【高柳克弘氏プロフィール】

1980 年静岡県出身。「鷹」編集長、読売新聞 KODOMO 俳句選者、早稲田大学講師。句集に『未踏』『寒林』など、評論集に『凜然たる青春』『隠された芭蕉』など多数。

事業部

風 声

○現代俳句七月号「列島春秋」欄

肉体の洋や心の空や夏休み

網野月を

○現代俳句七月号「第三回現代俳句『風を詠む』」欄

宿帳に書きし実名火取虫

菊池ひろこ

浴槽に凭れ見つむる黴の奥

青木鶴城

黙深む金魚ゆつくり裏返る

石井喜恵

そつと剃る産毛きらきら早苗月

内田恵子

秩父路や機音恋し宵螢

大塚茂子

乱れなくボレロのリズム雲の峰

岡田宣子

緑蔭の椅子に風待つ小半時

越田栄子

安曇野に水の息づく早苗月

五明昇

老鶯の森を響動もす谷渡り

反町修

碧眼も三枚小鉤祭足袋

原田秀子

参道は利休鼠の梅雨の中

本橋稀香

○くちら（中尾公彦主宰）六月号「受贈俳誌美術館」欄

盛り塩に惹かれ暖簾を春の宵

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）夏号「受贈誌拝見」欄

青春回帰春の小川を徒渡り

鬼之介

○卻（山本一步主宰）六月号「受贈誌の一句」欄

トロ箱の氷一闪鱗の青

皆川更穂

階下よりめでたき調べ琴始

反町修

（日高道を抄出）

後記

八月号をお届け致します。今月も皆様のお陰を持ちまして、発刊まで漕ぎつけました。誠にありがとうございます。

さて、先月六月二十八日には第九六回の水明全国大会を成功裡に終えて、記念すべき水明創刊百年へ向け弾みをつける会となりました。その全国大会の記事として、今月号では、「大会の記」「全国大会入選句」の特集記事を組みました。三極から佳作作品まで圧巻のボリュームとなっております。

また八月号の近詠欄は「愛」のテーマです。先月の「夏の花」のテーマに引き続き、執筆者の二人が共通のテーマを話し合い、共詠しております。今後どのような工夫が繰り出すか楽しみです。

「鼓笛集」は先月号から三人の選者のローテーションで企画されています。各選者毎に工夫を凝らして文面を作り上げています。水明集の同人作家の皆様の更なるお投句をお願い致します。

さて先月号の「水明賞受賞者ノオト」におきましては、小林京子氏の自選二十句の「春仲」「秋仲」の表記があったことについての問い合わせがありました。これについて筆者は、作者の工夫と受け止めています。嘗て、長谷川零余子の句集などには同様の表記があったことを考え併せれば、至当なことと思われまふ。

先月、俳句甲子園というイベントで、北関東大会の審査員を務めてまいりました。初めての経験で赤旗白旗を挙げる際には緊張いたしました。が、高校生の俳句に直接に触れたことは、大きな喜びでした。中学校の文芸部で俳句を始めた筆者としては、五十年前にこうしたイベントがあったらなあ、と感慨深いものがありました。

これから二ヶ月余は猛暑日、酷暑日が続くでしょうか。皆様、熱中症に気を付け、御身お大切にお過ごしくださいませ。

(月を)

今月のはてな？

黄泉平坂（よもつひらさか）
生身供（しょうじんぐ）
空師（そらし）
須波阿須疑（しわあづぎ）
顛顛（こめかみ）
車憎（くるまぐう）
喫驚（きつきょう）
霾晦（やなぐもり）
激湍（げきたん）
些（ち）と
彼誰時（かわたれどき）

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

87 83 52 37 27 ♪ 21 19 ♪ ♪ 12 頁

水明

令和八年八月号
通巻一一五号
令和八年八月一日発行

発行所

〒330-0064
さいたま市浦和区摩西一〇二二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央 美版

十月号 八月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(俳号)

題

[illegible]

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齡

歲

水
明
集

十二月号 八月十五日締切

都・市・町名

都 市 町

氏 名（排 号）

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢

歳

山紫集

十一月号 八月十五日締切

氏名(併号)

十二月の兼題

「木 槿」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枳から間を開けずに楷書でお書きください。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

鼓笛集

十一月号 八月十五日締切

氏名(俳号)

※当月は日高道を選です。

※当季雑詠で一句を投句ください。

※投句対象者 水明集の同人に限ります。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枳から間を開けずに楷書でお書きください。(鉛筆書きは不可)

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

都市又は府県名	姓並びに俳名
---------	--------

通信欄
(近況・感想などご自由に書き下さい)

[illegible]

送り先 〒三三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四―十一―二 水明 発行所

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

[illegible]

季音抄

山本鬼之介

花桐の雨むらさきの静寂かな
友はいま黄泉平坂遠花火
産声を待つ短夜の長さかな
夏霞コンテナ船の攫はるる
晩春や夜間飛行の灯のねむし
夏至の海入り日を塗す真帆片帆
おひらきは小学校歌皐月晴
噴水の女形の形に崩れけり
潮騒を掻き消してをり雨蛙
矜持もて生きよと母の粽かな
葉桜や一人は池の端を行く
木木香る青葉の里の能面師
山若葉ニンフが誘ふ森のカフェ
街角に人恋ふる歌巴里祭
半夏生十八歳の左袂
ペアカップやさしく洗ふ緑夜かな
トルソーの胸に罅入る薄暑かな
籐椅子の軋みに昭和遠くなり

梅澤佐江
大橋迪代
大場順子
大村節代
菊池ひろこ
五明昇
大塚茂子
正木萬蝶
松宮保人
青木鶴城
日高道を
檜鼻ことは
染谷風子
渋谷きいち
梅澤輝翠
越田栄子
菅原卓郎
新暦文

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

佇めば思ひ出めぐる夏の庭
夏座敷筆の穂先に風の音
春の暮ダイヤル重き黒電話
サーカスや流るるジント春風に
春時雨しだれ柳に雨宿り
幾度目か父の文読む春灯下
春灯や人待ち顔のベレー帽
集落に稚き声無し霾晦
蔵の町落花の中の野辺送り
警策ののちの静けさ鳥交る
D51疾駆新樹の中のループ線
春愁の頬杖といて夕支度
年輪に四季の移ろひみどりの日
今日の労とろかすやうに春ともし
行く春や十指の触るるそばの粉
春暑し蝙蝠傘の太公望
さりげなく座席を譲る薄暑かな
宿下駄をころころさせて遠蛙

丸屋詠子
綿引まりこ
阿部幸代
倉田星歩
反町修
内田章子
寺町知子
皆川更穂
田中弘子
室井早都子
森下山菜
本橋稀香
遠藤人美
杉浦千祐
秋谷風舎
飯田忠男
元田亮一
石関六弦

水 明 例 会 案 内	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野はるみ 岡田宣子
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和八年八月一日発行 毎月一日発行

(第九十九巻 第八号)

定価 一〇〇〇円